
テンプレチート？夢のまた夢だよ

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレチート？夢のまた夢だよ

【Nコード】

N0299BA

【作者名】

リヨク

【あらすじ】

目覚めたらリリカルなのはの世界に？

明らかにチート転生者も居るし、こっちには用途不明のレアスキルに聖王の鎧にばれたら殺されるであろう（自分が）ユニゾンデバイスのアギト……………。

これは主人公がチート転生者のオリ主（笑）から逃げるお話である。

憑依先はクローン（前書き）

あけましておめでとうございます！！
つーわけで新小説を！！

憑依先はクローン

何時も通り起きる、それが普通だった、だけど今日は体が重く、それで居て暖かった。体が何か温かい水に浸かっている様な感覚、いや実際に浸かっているのだろう。

重い目蓋を開けるとそこは研究所だった、本当にそれしか言えないのが辛い……。つかここ本当に何処？

「ゴボッ!? ……ゴボ、ガボゴボ（ここッ!? ……うえ、器官に入った）」

器官に入ったが大丈夫のようだ。

「ふむ、正常に作動しているな」

「魔力も高い、成功のようだ」

目の前の科学者? みたいなのが喋ってるんだがよく分からない。本当にここ何処？

六年後、あ？話が飛びすぎ？しょうがないよ、僕ですから。

まあそんな話は置いて……僕は魔法少女リリカルなのはの世界に居るらしい。え？分からないって？まあ簡単に言えば僕はこの体に憑依したらしい。

その体は古代ベルカの王族のクローン、聖王オリヴィエのクローンらしいです。性別はちゃんと男です、女になってたら自害しますコレ絶対。

まあ辛い訓練や実験は苦しいですが生きたいので何とか必死に生きています。

僕はヴィヴィオの成り代わりかと思ったんだけどここにはアギトも居たから絶対に違うって言う事だけは分かった。

そして僕はアギトのロードです、炎の魔力変換資質ですから使えます。

レアスキルは聖王の鎧以外にもあったりします、実質二つです。ですが使いこなせるかと聞かれたら使いこなせません、自動でも無いオートですし時間も少しですがかかります、それにこれは魔力ではないですし。

研究院達の話聞いて分かったのですが原作組、もとい原作キャラ達とは一応同い年です、あくまでこの身体の身体年齢と同じなだけですが。それに原作には居ない人もいた。

オッドアイのイケメン野郎、それに無限の剣製《unlimit
ed blade works》と言う名前のレアスキルが……。

どう見てもチート転生者です本当にハイ。

で、どうするか…………。

「とり合えず脱走しよう、アギト」

「わかったぜマイロード」

このままじゃあ殺されるからね、明らかにハーレム狙いだし…………アギトも狙ってるだろうし…………。

フラグは知らないところで立つ

あれから二年、脱走は上手く言ったと言えば上手くいった。前々から考えていた事ではあったし計画は時間をかけて練った。事実逃げ出せたのだからそれは良かったのだろう。

で、今は地球……なんで？

正解は地球の常識しか知らないから、お金についてもだ。

憑依前は純粋な日本人、それに何故か地球に惹かれる。

「よし！魚でも取るか！！」

「楽しみにしてるぜオウカ！！」

とり合えずバリアジャケットを着てモリを持つ、デバイスは単純な西洋剣だ。それを背中に携え海に飛び込む、春先の海水は肌を刺すように冷たかったがバリアジャケットがそれを守る。目にはゴーグルを付けていたので海水は目に入る事は無く呼吸はバリアジャケットがカバー出来ている。

「（今日は少し遠くまで行って見るか）」

——思えばあの時あんな事を思わなかったら良かったんだろう………。

「よし、大量大量♪」

アミには大量ともいえる魚介類や貝類があった、これだけあれば三日は事足りるだろう……。そして帰ろうかと思ったとき……。

「ん？何だあれ？」

海のそこに光る何かが有った。

「もしかしたらお宝かもしれない」

実際にこの二年間はお宝を見つけることもあった、少なかったとは言え質に入れ換金すれば大金にはなった。言ってしまうえば経験だ。

そう思いながら海に潜り、光る物の近くに行く。光るものの正体は

綺麗な日本刀だった。

「（何だ、外れか）」

だけど外れにしては綺麗な刀だ、むき出しのままなのに錆びてる様子が無い。むしろ新品のように光り輝いている。

「（まあ持っておいても損は無いだろ）」

そんな感じで触った。

——その瞬間刀を中心に莫大な力の奔流が生まれる。

「ゴボゴボ！！！！（やばっ……溺れる）」

急に海流が生まれその中に飲まれそうになる。

だが魔法を使い周囲を少しだけ蒸発させそのまま海面にでる。

「ぶは！！！」

すぐに体に溜まっていた二酸化炭素を全て排出し酸素を取り込む。

「ぜえ……はあ」

息をしながら何とか自分のペースを取り戻す、魚や貝はちゃんと持ってきた。ただ明らかに原因である刀も持ってきていた事には驚いた。

刀を手から離そうとしたが取れなかった。

仕方が無く腕を切り落とそうと早まったことをしようとデバイスの剣を背中から抜いた。このときの考えは頭に酸素が回っていなかった為である勘違いはしないで欲しい。

その時、手から刀が外れそのまま剣に吸い込まれる、剣は形を変え先ほどの刀に変わった。

「……一体どういう原理だよ」

そう言いながら僕は島に帰るのでした、マル。ちなみに今は無人島暮らし、ナレって怖いね。

酷い事？お前が言うな！！

「ケホケホ……………」

「大丈夫か？オウカ？」

あー、風邪引いた……………。原因は恐らく昨日の海流に飲まれた事が原因だろうな。あれから体中に変な力が渦巻いている、もう一つのレアスキルと同じ力だから恐らく体外に放出はできるだろう。

「……………今日は私が作るな」

「……………ああ、ありがと……………アギト」

ああ、平穏だ。研究所暮らしが長かったから今は平和が大好きだ、だけど何時までもここに居られるわけじゃない。

それに昨日の事もある、もしかしたらロストログアの暴発とかになりそうだから……………。

アギトもこっちに居る、あの転生者からは命を狙われるかもしれない。

「そろそろ潮時かな」

寂しく呟いた言葉は誰にも聞かれる事無く、響いた。

「もう朝か……………」

風邪はもう治った、力も何とか安定したものになっている。そろそろこの拠点から離れないといけない。何時管理局が来てもおかしくない……………だから……………。

「……………本当にここで魔力が観測されたんですか？」

外から声が聞こえる……………同い年くらいの女の子の声だ、その声の主は……………。

茶髪のツインテールの少女だった。

他にも金髪ツインテールとかショートの子とか……………。

なのは、フェイト、はやての三人だった。

「最悪だな……………」

これが世に聞くご都合主義なら間違いなく神様を呪ってやる。

まああの銀髪オッドアイのチート野郎は居なかった、それだけが救いだろう。

「オウカ……………」

アギトの小さい体が震えているのが分かる、僕のこの体を作りアギトと一緒に実験していた組織は管理局だった。偶然見つけた資料で知ったんだ。

だからアギトは管理局を信じなくなった、本来はシグナムの相棒になる筈だった子……………。

僕はあくまで一割がそんな事をやってるだけに過ぎないと頭の中では理解している、頭の中だけけどね。

「大丈夫、逃げられるから」

アギトを心配させないように抱きしめる。

「でも、でも……………」

「大丈夫だから……………」

自分の体も震えているのが分かる。

「あそこに移動船がある、それに乗れば……………」

——逃げられる、そう確信してもやはり怖い……………。

でも……………。

「逃げなくちゃ……………」

言う、言葉を紡ぐ……デバイスに名前は無かった、それを書き換えられ新しくなったこの刀の名前を言う。

「アマノムラクモ、set up」

虹色の魔力が体を包み込む、バリアジャケットが構成される。

バリアジャケットは綺麗な赤い着物に白色の羽織、足はシンプルな靴、籠手もあり以外に丈夫そうだ。

「走って逃げる」

足から魔力を放出する、魔力は炎に変わり速度を上げる。

「おりゃあ……!!」

洞窟から飛び出して海岸にあるもう一つの洞窟に置いてある次元移動船に乗れば良い。

いきなり飛び出したため三人に気づかれる、それでも逃げる。

「待って!!」

高町なのはが僕を止めようと声をかける、だけど止まっていたまるか……!!

「待ってください!!!時空管理局です!!!話を」

今度はフェイト・T・ハラオウンが目の前に立ちふさがる。

「い、嫌だ!!!」

素直にはつきりとそう言う、そう言ったときのフェイトの顔が少し泣いていたが気にしない！

八神はやては遅い、つまりフェイトの隙を着いた今なら逃げられる。

「うおらあ！！！！」

「ぐふ！！？」

せ、背中がああああああああ！！！！！！聖王の鎧があると言って
も衝撃までは殺しきれないんだよ！！

誰！！！？一体何！！！？

「全く……手こずらせやがって」

背中に足を乗せるのは赤毛の三つ編み………守護騎士の一人ヴィー
タだ。

何でここに………って回りをよく見ればあの転生者以外全員居るじ
ゃない……アンビリビーバボー！

「まあ待てヴィータ」

ヴィータに声をかけたのはシグナムさん、ゴメンあんたの未来の相
棒は僕の相棒です。

「やっと止まったの」

「うう………」

「泣きやんでえなフェイトちゃん」

ああ、全員来てしまった……中には消えたはずのリインフォースも……。

「おい！てめえ！何でこんな所に居るんだ！！」

耳元でうるさい声出さないでくれ……病み上がりなんだから。

「待てヴィータ、流石にそんな口調では言えないだろう」

「そうだよヴィータちゃん」

『……アギト、今なら』

『ああ……』

「ねえ君、名前教え」「ユニゾン・イン」てッ！！？」

名前なんか教えない、教えてあげない！僕の平穏を乱す者には教えてあげない！！

そう思いつつも一時的にぶっ飛ばせたのはあくまでほんの一時。

「あれはまさか融合騎！？」

「リインフォース以外のユニゾンデバイス……」

リインフォースが驚き、はやても何か言っている。

「今のうちに逃げ……」

「てやあああああ!!!!」

ってまたかヴィータ!!?」

「くそ!」

——ガキン!!

刀を鞘から抜き振り下ろされた槌を防ぐ。

「まさかベルカの騎士だったなんてな」

「アハハハハ、アンタとその武器合っていないね、幼いって言うか」

「ッ!てめえ!!」

おお、こんなに簡単にきれた。
だけど遅い…………。

「いや、アンタの体系じゃあそれを使いこなせないんだよ、幼すぎてね」

そう言うヴィータの首を掴む、もちろん絞める。

「ぐ!!」

そして水月に膝蹴り、デバイスを放した一瞬を狙いデバイスに斬りかかる。

——ザンツ!

デバイスを横に真つ二つにし、そのヴィータの首から手を外し腕で締め上げ刀で固定する押さえつける。

「ヴィータちゃ」

「動くな!!」

一括する、その一言で静かになる。

首に固定している刀でヴィータの肌を傷つけ」流血させる。

「全員解除しデバイスをこっちに投げろ」

「な、なんでこんな事をするの？」

なのはがそう言う。

「解除しろ、女」

だけど無視する、冷徹に…………。

「駄目だなのは!こいつの言う事を」

——ゴキ

少し煩いので黙らせる、つっても首の骨を折ったわけではない。折れてないよね?

「ヴィータちゃん!!」

「黙れ」

なんか自分が悪役になってきたんだけど……………。
まあ良いよね。

「良いからとっとデバイスを解除して投げろ」

「……………」

全員が解除してデバイスをこっちに投げる。

僕はヴィータを放り投げると相手のデバイスを海に向かって投げる。

「ユニゾン・アウト」

「おう!! 逃げるぞ!! オウカ!!」

このまま逃げる、よし!! 上手くいく!!

「……………なんでこんな酷い事を……………」

なのはが最後まで言っている。

……………そうだ!

「お前等がそれを言うか?」

ここまで言っておけばもう僕達には関わらないだろ、原作キャラ以外の魔導師って大した事なさそうだし。

それに大した事無かった、恐らく転生者が弱くさせているんだと思う。

「もう二度と会わないことを願いな、今度は殺すから」

「何やってんだよ!! 管理局の連中と話すなよ!!」

あ、ヤバイ。アギトが泣きそうになってる……………。

「ゴメンね、アギト、少し腹がたったから」

「それならいいんだけどよ……」

取り合えず僕達はこの場から放れて船に乗り込む。

「行き先はランダムで、もちろん虚数空間以外でね」

そう言うのと動き出す船、目の前は光に満ちていた。

桃色の光に

「なんでさ」

そのまま船は大破し、海に放り出された。

遺跡とかに迷ったら敵とかと遭遇するよね、嘘？しないって？？

「ふは……………はあはあ」

あの後漂流して何とか陸地？にたどり着いた……………。陸地と居っても海の中にある遺跡に入ったら空気がある程度だったんだが。まあ海に投げ出された時に追撃とかされたからな、主になのはに……………フェイトは必死に追いかけてきたからな、結界を破壊して海に潜ってやり過ぎた。だけどまさか海にまで砲撃するとは……………恐ろしい。

なんという冷血さ……………。

「でも逃げ切れたんだね」

「ケホケホ……………、なんとかなあ」

アギトも無事だったし、これからのことを考えないと……………。それにしても……………。

「ここ何処だ？」

本当にここ何処だよ……………見た事も無い遺跡なんだけど……………もしかしてまだ発見されていない遺跡とか！！？それなら俺が第一発見者になって……………って駄目だ。僕戸籍持っていない。これなら不法滞在者になって罪に問われる……………そんな事はあってはならない！！

「それはともかく……」

見た事も無い遺跡、謎の場所……コレほど心を躍らせる物はあるだろうか？否、無いであろう……考古学者じゃなくても探検してみたいと言う気持ちがあるだろう。
何が言いたいって？つまりは……

「探してみるのも一興かな？」

子供心を制御できない訳ではない、これは知識欲だ。たぶん……。それに何故かこういう場所は昔から惹かれる。

「よし！じゃあ探検しようか！！」

こうして始まった遺跡調査、中々楽しそうな始まりだった。

「ここってかなり古い遺跡だねえ」

それに見た事も無い物質で構成されているし……それに良い匂いがする。

「でも良く見れば罨とか色々あるな」

「引っかかるなよ」

「分かってるって」

つかこんな分かりやすい物を含めても遺跡に罾があるってことくらい分かるだろうね、コレ世界の常識。

「まあアニメや漫画とかならここで罨にかかる人が居るけど……」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「……おい、オウカ」

「聞こえないよ、僕には聞こえない」

そう、僕には聞こえない……。水樹奈々ボイスの少女の声なんか聞こえない！！

そうしたいけど何故か何かが転がってくる音がするんだよね、うん……こっちに近づいてくるような音がするね。

「アギト、逃げよう!!」

「おう！」

こんな厄介事には関わらない方が良く、逃げた方が良くに決まっている。

「あ！そこに居たんだ！！」

真・ソニックスフォームってSTSじゃなかったっけ？

「なぜだああああアアアアアア!!!」

僕はバリアジャケットを着てアギトとユニゾンし、フェイトに背中を向けて逃げ出す。フェイトはそんな僕を見て追いかけてくる、その後ろにはアニメとかによくある巨大な岩の塊が転がってきていた。

「ちょ!! こっちくん!! 明らかにアンタを狙っているから!!」

「私だって好きでこんな事してるわけじゃない!!」

「いや、あんたが罨を」

——カチッ

何? 今何押したこの子?

「あんた……まさ」

——ビュン!!

最後まで言い切る前に矢が投擲されましたよ。
ってあぶな!!

やっぱり原作キャラは疫病神だうん!!

「何で罨を押すのかなあ!! かなあ!!?」

「私だって好きで押しているわけじゃ……うう……」

「泣いたって許しません!! コレ絶対!!」

本当に何で泣くんだよ!! 僕の方が泣きたいよ!!

……………そういや

「ねえ、何であの岩に攻撃しないの? 魔法なら……………」

「……………さっきから試してるんだけど無効化される」

「マジ? そういや僕も魔法を上手く使えないような」

ってそれかなりピンチじゃない!!

「どうにかならないの!!?」

「少しだけなら足止めは出来るけど……………」

「くそ……………それじゃあ駄目……………」

アレなら壊せるだろうけど今の状態じゃあ出す前に死ぬ……………って
……………もう行き止まり!!?

「嘘でしょ!!?」

ヤバイ!! だいたい離れられたけどじきに潰される……………。
くそ!!

「くそつたれ!!」

壁を思いっきり殴る、それで壊せるのであれば苦労は無い……………。

ただ音が向こう側まで響くだけ……………この壁の向こうに空間がある？

「こうなりゃ一か八かの賭けだ！！フェイト・T・ハラオウン！少しでも良いからあれ足止めしろ！」

「え？う、うん」

フェイトが頷き、バルディッシュを転がってくる岩に向ける……………。

「すう……………はぁ」

落ち着け、アレを出すのには体中が痛くなる……………。まあ今回は命の危険があるからしょうがないけど。

——理念を捻じ曲げ概念を破戒し理想を夢見現実を逃避……………あらゆる事象を再現し星を目に写す。

……………眩暈がする……………吐き気も今来た。
なんでこんな厨二見たいな台詞を考えないといけないんだよ、ぶっちゃけ現実逃避だろ。

——太陽に接近し……………繋ぐ。

「ッ！！ぐふ……………」

やば、血が出てきた……………。
体の感覚が無くなっていく感じだ……………体の端から食いちぎられている感じ……………何時まで経っても慣れない。

——アクセス完了。

よし、来たきたあ!!

「ゴフ……………」

口から大量の血が流れ出る、それと同時に空間が歪み壁に火がつく。火は捻じ曲がり壁を破壊し吸収して大きくなる、それはそのまま向こう側まで開通した。火はすぐに消える、元々そんなに長く出来ないからな……………。

「あ…………あがああああ!!!!」

体中に激痛が走る、そりゃそうだよねえ……………体の肉片が無くなっ
ていくんだから……………。
ってこのままじゃ僕潰される!!?」

「危ない!!」

フェイトが僕を掴んで走る、どうやら向こう側は階段になっていた
ようだ。
フェイトは階段を登る、岩は階段の途中で止まり、そのまま下に落
ちる。

「た、…………助かった」

本当にギリギリだった、この時くらいは原作キャラに感謝くらいは
しても良いだろう。
って

「元はと言えば僕の平穏な日々を壊した管理局の連中が悪いんじゃない

ねえか……………」

「……………何でそういう事を」

「お前等が悪い、ほら、アギトも怯えちゃって……………」

服の中で震えているアギトを抱きしめる。

フェイトはそれを見て少し心を痛くしたのか辛そうな顔になる。

「……………嫌いなんだね、管理局の事」

「嫌いじゃない、心のそこから関わりたくない、聞きたくない、滅んでしまえば良いと思う」

これは本心、ぶっちゃけ無くなってしまえば良いとすら思ってる。

「そんなに言わなくても……………」

「言うよ、いくらでも……………。百害あって一利なしじゃあ無いけど僕にとっては害の方しかない」

「……………」

「あの実験からやっと逃げられたんだ、クローンとしてじゃなく人としての幸せを得たいと思うのは当然じゃない？」

「ッー!!まさか…………プロジェクトF・A・T・E!!!?」

フェイトが大声を上げる……………そりゃあねえ……………自分の出生に関する物だから見逃すはずがないよな。

でも僕にとってはどうでも良いことなんだよ……………。

「つつても僕は昔の人間のクローンらしいから」

「……………貴方もスカリエッティの……………」

「スカリエッティのせいじゃないよ、あれもクローンだよ。それもアルハザードのね」

「ッ!!!?でも、スカリエッティは罪を!!」

フェイトは叫ぶ、そうでもしないと自分が何を目的に行動してきた全てを否定されないからだ。

そんな事はしないし僕にそんな発言力はない、こんなの戯言、いや……………戯言以下だ。

「それをアンタが言う?この世界を滅ぼしかけたのに」

「あ……………」

「八神はやての持つてる夜天の魔道書の守護騎士達もだ、管理局に入局したら罪が償えるとしても?甘ったれるなよ、そんなに罪が償えるのか?」

そう、二次小説とかではオリ主が守護騎士達は主に命令されてただけで仕方なく魔力を徴収していたとかで罪がなくなるのがあるけど……………被害者側から見ればそれは溜まったもんじゃない、はやてもはやてだ。

自分も罪を被るとか言っているけど犯したのは守護騎士なんだ。

世界はご都合主義で出来ていない、悔しいけどこれが現実なんだ。

「それに守護騎士は人間じゃない、人間じゃないのに人間の法律で裁くなんて可笑し過ぎる」

「そんな事無い！！シグナム達は……」

「悪いけどあんたの意見なんか聞いてない、私から言わせれば貴方も守護騎士達もちゃんと罪を清算してない、ずっと犯した時のままだ」

きつと自分の目は本当に酷く冷たいんだろう、本当はこんな事は言いたくない。

「でも一つだけ言っておくよ、生きている限りは罪を重ね続ける事もできるし清算する事もできる……それに死んだら罪がなくなるわけじゃない、むしろ死んでからが辛いんだ……本当に清算したいなら自分の思いで行動しな、生きているんだろう？」

「まあ、アンタは若いんだから地道に考えな。自分自身でね」

まあ、自分で考えた方が一番良いんだけどね。そう言いながら僕は立ち上がり上を目指す。

「マナさんのようにね」

まあこれは余計な事だったかもしれないけどね。

「で、到着っ」と

「……………」

フェイトはすっかり喋らなくなった。

まあ言いすぎたのが悪いかもしれない、でもアレくらいなら反論の余地はある。

でも、反論した所で何かが変わるわけでもない、これは世界の法則なんだから。

それは反論する事が出来るけど変わらない不変。

「何考えてんだ僕は……………」

さっきから近づくにしたがい考えが変わっていく。

「……………さっきはゴメンね、少し言いすぎた……………」

「……………」

「でもさ、お前って子供でしょ。ならもう少し子供らしく振舞えば良いよ、そうすれば気がつかなかった物も見えるはずだからさ」

まあ自分の言葉は矛盾だらけだから、そんなに考えない方が良いよ。

「さて……………ようやく着いたわけだけど……………」

目の前にあるのは壁画？のような物だった。

山の上に剣と写輪眼の文様と太陽みたいな物を宙に浮かせている犬の様な物が画かれていた。

「何コレ？」

まあ変な物には変わらない、取り合えず写真。

「よし、上手く撮れた」

綺麗に撮れた、けどさつきからフェイトが下を俯きっぱなしだよ。少しくらい元気にしたほうが良いな。

「お前が今何考えているのか分からないけど、人間か人間じゃないかなんて些細な違いだよ。それともなに？お前は自分が人間じゃないとか思ってるの？」

「違う……」

「そうだな、クローンは人間だ。人と同じで人を愛せるし憎む事が出来る。それにアンタは綺麗だからさ、クローンだと知っても好きで居る奴の方が多いんじゃないか？まあそれで皆がお前の事を嫌いになっても僕は好きだぜ、時空管理局としてのフェイトじゃなくフェイトと言う一人の存在が。話して楽しかったしね」

あの後何とか出られた……………まああの壁画の横に階段が合ったからそのまま上ってきた。

「うーん、空気が美味しい!!」

アギトは今寝ています、フェイトは未だ俯いています。

「…………じゃあね、もう二度と会わないと思うけど」

そう言って立ち去ろうとした、その瞬間バルディッシュ鎌バージョ
ンで首を押さえられている。

「な、何を」

「…………すみませんが貴方を時空管理局員として……………いえ、フェ
イトとして保護します」

あれ?ドウシテこうなった?

「な、何で?」

「貴方がさっき言った事です、時空管理局に捕まったら実験される
かもしれないですよね?」

「う、多分そうなると思う」

この体は唯一の成功作品だし性能良いし……………。

「なら時空管理局としてじゃなく、フェイトとして貴方を保護しま

す。大丈夫、ちゃんと世話するから」

あれ？目おかしくくない？何ていうんだろう……要領オーバーでパ
ンクしたと言うような感じだ……。

「あの？お願いですから逃がしてください？」

「駄目です、私が貴方を守るから」

「ねえこれってスルーしてるよね！！僕の言葉を返してないよね！
！？」

ヤバイ、本当にヤバイ……。

どうにかしてこの場を離れな……って、誰だあれ？

弓を構えてこちらを……あの剣てたしか……ッ！！？

「危ない！！」

宝具は絶対だと思われがちだが実際はそうではない（前書き）

携帯電話？じゃあ書きづらいでした。

そして一応転生者も出せました。

宝具は絶対だと思われがちだが実際はそうではない

俺は神崎大輝、所謂チート転生者だ。

貰った物はオッドアイで銀髪、ニコポ、高い魔力にエミヤの無限の剣製だ。だが最初は本当に酷かった、中身の無い空っぽの物しか作れなかったからな。

だが原作に関わってからはずっと宝具も投影できるようになった。プレシアは救えなかったけどリインフォースを救えたのは良かった。おかげさまで原作キャラにも好かれている。

P・T事件はなのはの味方だった、フェイト側をについた転生者も居たがあそこまで欲望垂れ流しだとは思わなかった……。

闇の書事件でも転生者はいた。

両方とも牢屋のなかだけだな。

そもそもクロノをKYと呼ぶのが理解できない。

まあ色々あったが俺はオリ主になった。

なのは達も俺に優しい、普通に話してくれるし一緒に遊んだりもしている。

だけどフェイトは違った、明らかに男を避けている明らかに他の転生者にクロードとか言われて脅されていた。フェイトをハーレムに加えたいけど今のままじゃ何もできない、幸いフェイトの中で

俺は信頼できる人間らしい。でも今のままじゃあなんの進展もない。どうにかならないかと思ってたが転機が現れた。明らかに原作じゃあ現れない事件が起こったからだ。まず間違いなく転生者だろう。

ただ俺はすぐに行けなかったためなのは達に皆で行けと言った。

だが逃げられた上相手がアギトを所有していることが分かった。

俺は急いで地球に戻ることにした、間違いなくそいつもハーレム狙いだと分かった。アギトを所有している時点で原作に接点を持つようとしていることか分かる。

そして地球に戻った瞬間にサーチャーで見つけた、フェイトと知らない奴が一緒に居るのが分かる。

俺はカラドボルグを投影する、だけどこれじゃあ威力が高過ぎる………。

そう思った俺はカラドボルグを地面に突き刺し矢を投影する。

弓は無駄無しの弓だ、^{フェイル・ノート}これなら威力も申し分なくなる。

そして弓を構え、放った。

僕はフェイトを突き飛ばす、その際胸を触った。柔らかかった……

って違う！

あのオリ主が弓を構えている、地面にはねじ曲がって刺すことにしか使えないような剣、カラドボルグが刺さっている。
フェイトが近くに居るからなのか射てないようだ。

「大輝！？なんでここに！」

フェイトは叫ぶ、どうやら予想外の事らしい。

「くっ！」

——ガキンッ！

刀で射られた矢を弾く、力を使うがいなせないほどでもない。
オリ主もどうやら今ので矢が効かないと判断したのか刺さっていたカラドボルグを持つ、どうやらフェイトが怪我するのを覚悟の上で使うつもりらしい。

後ろに居るフェイトの姿を見る、両手を地面につけふせている。
……どうやらフェイトは念話で説得したが断られたらし……。
つまり投降しても意味はないということ、まあ投降しても意味はなさそうだけど……。

「……アギト、起きろ」

指でアギトを小突く、アギトは少し声を唸らせ目を覚ます。

「んゝ、どうしたんだよオウカゝ……ってなんだよあれ？」

「分からない、まああの攻撃を防ぐから早くユニゾンして」

「つてあれを防ぐのかよ！はあくまあいいや、じゃ」

「「ユニゾン・イン」」

まああれを防ぐのはかなり難しいけど防げないわけじゃあない、劇場番のF a t eではキャスターが一時的とはいえ防いでいるのが例だ。

それにこの距離なら……。

「アマノムラクモ、カートリッジロード」

——ガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガシヤン！

「嘘！？カートリッジを十個も！！！？」

フェイトが後ろで叫んでいるが気にしない、と言うより構うことが出来ない。

刀を鞘に納めて構える、狙いは一瞬……。

「駄目！逃げて！大輝のあれは本当に危ないから！」

フェイトが逃げても良い許可を出した、けど逃げる暇が無い。

それにカートリッジを十個も使ったんだ、今止めたら行き場を失った魔力は暴走して体を壊す。

「あー、無理」

一応フェイトに返事しておく。
集中したまま返答を待つ。

「どうして…?」

「今逃げたらあんたが食らうだろ?」

「確かにそうだけど」

「僕嫌なんだよね、傷つくとしていながら逃げるのは、例え管理局でもね。まあこれは建前だけだね」

それに…。

「本当はこんな可愛い女の子を一度で良いから守ってみたいって感じかな? 同じクローンとしてじゃなく一人の男としてね」

「ッ!？」

さあて、ようやく準備完了だ。これにうち勝てなければ俺は捕まって実験漬けの毎日に逆戻り……。
勝てば――。

――チート野郎が剣を矢にする。

「蛇竜――」

鞘から刀を少し抜く。

――チート野郎の手が開き矢が放たれる!

「――突ッ!」

鞘から刀を抜き、接近してきたカラドボルグ目掛けて突くッ！

カラドボルグに蛇竜一突が直撃する。魔力を全て一点に集中させる。普通はカラドボルグなんかとぶつかり合えばこっちが折れる、實際この前のデバイスならば間違いなく折れてたと思う。

ただこの前の刀を取り込んで以来かなり強固になって切れ味も上がっている。

何かのロストロギアかは分からないけど宝具と打ち合える代物になっているらしい。

それに少しだけ角度をずらしている為真っ向からぶつかり合うわけじゃない。

それにアギトの魔力に聖王の鎧が体を保護してくれる。だけど相殺するには時間がかかる、その間に第二撃が来る。その前にカラドボルグを破壊する必要がある。

その為にも、もう1つのレアスキルを使うしかない。

「……アクセス開始」

体に走る激痛、肉何かにつまんでは千切られるような痛みが走ります。

「ッ！……アクセス完了！」

その言葉の後に炎が走る、その炎はカラドボルグを包み込み破壊する。視界は炎に吞み込まれ見えなくなった。

「ぜえ……転移魔法……」

自分が立っている場所に魔方陣が現れる、少し時間がかかるとは言え確実に逃げられる手だ。

「……ま、待って！」

そう言っ僕の手を掴むフェイト……。

なんで掴むの！！？って言いたいけどレアスキルの影響で今はしゃべれない。

そして炎が晴れるとチート野郎が紅い槍を弓で射ろうとしていた。紅い槍と言ってもゲイ・ボルクかどうかすらも分からない、流石に視力にも異常が来ていたのかよく見えない。

だけど何故か分かった、あの槍かが非殺傷設定ではなく、殺傷設定でしかもそれがフェイトに当たると言う事が……。

それが分かった瞬間僕はフェイトをだきよせる。

「な、何を」

——ザシュッ！

「する……の？」

紅い槍はゲイ・ボルクじゃなく、ゲイ・ジャルグの方だった。

「————ッ！！！！」

ゲイ・ジャルグは右肩を容赦なく貫く。

肩に走るのは貫かれた痛み。

体が少しでも動いたのが幸いだったのか、左手でゲイ・ジャルグを掴み捨てる。ゲイ・ジャルグはその直後に爆発する。

そして右肩から溢れる血液を止めることなく、転移した。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からない（前書き）

旅行は楽しかったです！

ただ外が吹雪いていたけど……。

そしてベッドで寝ていたら落ちたらしいです。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からない

「く、ツツッ！」

「動くなよ、包帯を上手く巻けないじゃねえか……」

場所は林、チート野郎から逃げてきて十分、僕は普通の人体型になったアギトとフェイトに貫かれた右肩に包帯を巻いてもらっている。血はアギトに治癒魔法を使ってもらい止血した、アギト自身は治癒魔法が苦手らしけどこの体は治りが早い為すぐに治った。だけど右腕を動かすには後三日くらい時間がかかる。

その為にもホテルを借りないといけないのだが……。

「ねえ、フェイト……さん」

「フェイトで良いよ」

「じゃあフェイト、二つ聞きたいんだけど」

「何？言える事なら話せるけど」

「僕を殺傷設定で攻撃した人の印象を教えて欲しいんだ、フェイトを含めた全員のね」

そう、これが聞きたい。

チート転生者の殆どは原作キャラから好意を寄せられる。

全員から好意を寄せられるのが多いけどもしかしたらあまり快く思っていない奴も居る筈……。

そいつを味方につけられたら……、まああくまでも最後の手段としてだが。

「なのはとはやて達は多分、ううん…間違いなく好意を持ってる」

予想は出来てたけど女性陣は敵か……。

だけど男性なら

「ユーノやクロノ義兄さんにザフィーラも信頼できる最高の友人って言ってた」

駄目か……、これは予想外だったな。

ユーノを淫獣、クロノをKYとか言って毛嫌いしてるかと思ってたけど……。

さっきの事もあるけどフェイトも……。

「私とアルフ、まあ私の使い魔なんだけど……あまり信用してない……」

それは以外だった、まさかフェイトがあまり信用してないとはね、アルフはそうでもないけど。

「へえ、どうして？」

「……昔私に関わった事件、まあ私のお母さんが起こした事件なんだけど」

つまりP・S事件の最中、もしくはその前後か……。

「続けて」

「うん、私が来たばかりの頃にアルフと一緒に町を歩いていたんだ」

「それで？」

「……アルフが血の臭いがするからってその場所に行ってみたら」

あ、成る程……分かった。

「人を殺していたと」

「うん……」

で、それを言おうにしても証拠が無い。

それに信用されている男が殺人等と言うふざけた事をする筈が無い、と言われるだけだ。

「まあそれじゃあ信用するなんて無理だわな」

そりゃあ無理に決まってるだろう、殺人を犯した相手を信用しろと言う方がヤバイ。

一般人がアニメや漫画を見て共感するのは違い、実際に起きた事件で私利私欲の為に殺したとなれば信頼なんて失せるに決まっている。

「はあ……………、かなりヤバイな……………」

このままじゃあ本格的にやばいからな。

「……………ねえ、時空管理局に捕まればなんだよね……………」

「？まあそうだな」

どうしたんだ？フェイト……………。

「ならさ」

僕はこの後フェイトが言った言葉に度肝を抜かれた。

「……………確かに、それなら……………でも……………僕も危険だしフェイトも巻き込むことになる」

「ううん、私達が貴方の事を……………それに殺傷設定で放った事もあるから……………」

ああ、しょうがない……………今はフェイトの言う事を聞こう。

「アギト、嫌かもしれないけどフェイトの言うとおりにしよう……………」

「私はロードの言う事に従うだけだ！それにこの金髪は信用できる……………！」

「どうやらアギトに気に入られたようだね」

アギトが管理局の人間なのに懐くなんて珍しい、でもフェイトは信頼できる。

だからなのかフェイトと一緒にいても嫌な感じはしなくなった。

「……そういえば何で私達の名前を知ってたの？なのはには女って」

「ああ、アレは脅しやすくする為に言っただけ……名前が研究所で」

本当にこういう時だけは便利な研究所、その名前を出すだけでフェイトは少し辛そうな顔をする。

まあ本当は前世のテレビで………そういや何時見てたんだっけ？まあコレだけ長い時間が経っていれば忘れるよな。

「じゃあ………これからよろしく、フェイト」

「うん、よろしくねオウカ」

「フェイトちゃん…………大丈夫かなあ？」

なのはが心配している、だが大丈夫だ…………フェイトはあの野郎に放ったカラドボルグの衝撃でぶっ飛んだ筈だ。

最後に放ったゲイ・ジャルグ以外は非殺傷設定で放った、アイツの死体が発見できなかったが直撃した証拠に地面には血があったからな。

「たぶんな、アイツが非道な事をしていなかったら大丈夫だ。それにフェイト程強ければ戦いだって持ち込めるはずだ、その時に魔力を感知できれば」

「うん…………そうだよね」

どうやらその転生者はかなり酷い奴らしい、ヴィータを迷い無く気絶させ人質にした。

それにそんなに酷い奴にフェイトは惚れない筈だ、ハーレムを狙って地球に来たんだろうが惚れるわけ無い、馬鹿な奴だ。

「なのはちゃん、大輝君！！フェイトちゃんからの通信が来たで！！」

お、はやてが来た。

それにフェイトからの通信も…………どうやらアイツと一緒に居ないようだ。

「だけどな…………暫く戻れそうにないようや」

「はっ？」

俺ははやての口から放たれた言葉に度肝を抜かれる事になる。

「ふう、これでよし」

「でも本当に良いの？ フェイトまで巻き込む事になるけど」

「良いよ、それにあくまでも私の言うことに従っていれば大丈夫だから………」

フェイトが出した条件、それはフェイトの近くに居る事。

そしてあのチート野郎が殺人、もしくは殺人未遂の証拠を掴む為に協力すると言う事、アイツが僕の肩を殺傷設定で攻撃したという事だけではまだ無理らしい。と言うより証拠が上手く取れなかったらしい。

そして僕を使って証拠を掴むと……、つまり僕は魚釣りの餌ですね分かります。

でもフェイトに協力する代わりに僕とアギトは事実上管理局の預かり扱いになっている。

フェイトの近くに居ないと駄目になるが管理局員が来てもフェイト

に守ってもらえる、まあ持ちつ持たれつの関係になると言う事だ。
だが所詮形だけ……、あのチート転生者が何か言えば原作組みは
僕を襲うだろう。

「でもその服じゃあ………」

「…あー、確かに」

今の服は言ってしまうとかなりボロイ、基本魔力を頼っていたし一人暮らしだったからこの服しかない。

「…………取り合えず服を…」

「お金ならあるけどね」

そう言って札束を出す、換金していない宝石なども含めればかなりの額にはなる筈。

「…………お金持ち？」

「まあ一応富豪並にはあるけど……………」

「…………取り合えず行こう」

そのままフェイトに連れて行かれ服を四着ほど買った、安い服にしたかったが結構高い服になった。

そして何故かフェイトの服も……ぶっちゃければフェイトの服の方が…………、一応人間サイズのアギト用の服も買った。

「じゃあ次はご飯にしよう」

「……まあ出費がでかかったのはしょうがないよな」

僕の服の出費だったわけだし、フェイトとアギトは女の子だ。服は多い方が良さだろう。

ともかく、ようやくご飯だ。

既に日は暮れ始めているし……、長く居すぎると警察が職務質問とかしてきそうだからね。そう思いながら歩き始める。

「そこのお嬢さんたち」

現実で変なおじさんに話しかけられたら逃げろ、相手にとって男も女も関係ない

S t S 編をよろうか迷ってます…

現実で変なおじさんに話しかけられたら逃げろ、相手にとって男も女も関係ない

「そこのお嬢さんたち」

いきなり僕達は変なおじさんに話しかけられた。

初老の男性できっちりとした正装、白髪で威風がある髭等が只者ではない雰囲気を出していた。ただど攻撃的ではない。

「何ですか？」

「占いをやっていかんか？今ならロハでやっとなるぞ」

「やります」

ロハ、つまり無料、只だ。

やっておいて損は無い、占いって言うのは所詮英気を養う為に行う物だ。

それに良い気分になる。

「全く……」

「と言いつつも乗り気だねフェイト」

アギトも面白がっている、女の子好きだからねーこういうの……
…。フェイトとアギトも立派な女の子だったって言う事か………関

心関心。

……そう思っていたら二人から蹴られた、何か失礼な事を考えたとかいってた……なんで分かった？

「ホホホ、元気が良いのお。どれ、手を出してみんしゃい」

なるほど手相占いか………信憑性なんて全く無いけど一番知られて
いるメジャーな占いか……。

そう思っているとフェイトが手を出した、初老の男性はそれを手に取
り……。

「ホッホッホ、若い娘の肌は良いのお」

「真面目にやれ!!」

このおっさん本当に占い師か？もう変態しか浮かばねえよ。

「スマンスマン、本当はこっちのが占いに使うモンじゃ」

そう言っておっさんは皿を出し水を入れる、そして何かが入ってい
る袋を出す。

「これを皿の中に入れてみれ、これが占いじゃ」

聞いた事も見た事も無い占いだった、いや……探せばあるかもしれ
ないがこんな占いは憑依前でも見たことが無い。

「こんなのが？」

「まあそう言う占いじゃ……………」

このおっさん変だ、でも悪意は無い……………まるで子を見守る親のような感じだ。

そう思っていたらフェイトが袋から丸い物を取り一つ入れる……………水の色が変わり始める、色は青。

「ほお……………青か……………」

「……………これって色を占うんですよね？青はどんな意味を……………」

フェイトが真剣に聞く、本当に女子って占いが好きだなあ……………。

「これこれ、急かすんじゃない……………お嬢ちゃんは過去、未来、現在……………どれが良い？」

おっさんがフェイトに質問する、でもなんでその三択なんだ……………。

「私は未来です」

「その理由は？」

「私には一緒に居て楽しい友達がいま、その人たちと一緒に未来を歩みたいからです」

「そうかそうか……………」

おっさんはフェイトの答えを聞いて頷いている。

「じゃあ占いの結果じゃ…………お嬢ちゃんには死んでしまった姉のような人がおるのお」

「え!？」

このおっさんはフェイトに姉に近い人がいるのを断言した。
何故かは分からないけどこのおっさんが少しだけ怖くなった。

「何で…………その事を」

「その様子からするとあたりのようじゃな」

「…………はい」

「その死んでしまった姉はいつでもお主の事を見守っている、と言っておるのお」

「…………そうですか」

「幸せになって欲しいとも言っておる、私の分まで幸せになつてとな」

「……………」

フェイトの目からは涙が零れ落ちていた。
そして確信した、このおっさんが占い師ではない事に…………。

「おっさん、シャーマン？」

「昔はな、色々に見えるんじゃ、近い未来とかものお」

なるほど、だからか……占いではなく予知。

「まあ絶対ではないがお、千回に一回は外れるからのお」

そして高確率で成功する事が分かった。

「それでさっきの続きでのお、フェイトよ……自身を持って、たまには素直になってと言っておる」

「はい……はい……」

フェイトが泣く、両の手で顔を抑えながら……泣く。

「次は小さなお嬢ちゃんじゃ」

「おう!!」

そう言ってアギトは袋から取り出し一つ入れる、色は赤。

「赤か、お主はどれが良い？」

「あたしは過去だ!色々と辛かったけどオウカと一緒にだったからな!!」

「ほお、お主はオウカが大好きなんじゃな」

「ああ!!」

アギトが嬉しい事を言ってくれる、本当に嬉しい。

こんな僕を好きと言ってくれるのもアギトくらいだろう。

それにしてもフェイトは泣き止まないな……………。

「なあ、フェイト……………胸くらいは貸すけど」

「……………ありが、とう……………」

そう言っつてフェイトは僕の胸に顔をつける、そして泣く。

色々と溜まっていたのか？原作じゃあ闇の書に取り込まれた時に解決したはずんだけど……………。

もしかしてあの野郎が邪魔したとか？全くいらない事を……………。

「良い雰囲気じゃが、次はお主の番だぞ」

「あ、ああ」

何時の間にかアギトのは終っていたらしい。

アギトの顔を見ると僕の服を掴んでいる、何を言われたんだ？

そう思いながらも袋から取り出し、水に入れる。

色は変わらず透明のままだった。

「ふむ、なるほどのお……………お主はどれじゃ？」

「僕は……………現在かな」

「何故じゃ？」

「……………僕は未来はすぐにやってくるし過去も永久に来る、なら現在いま

は一瞬しかない……だからです」

「そうか……」

おっさんはそのまま優しそうな顔でこっちを見る。

だけど口は何かを嚙んでいる、言うべきか言わないべきか……。ただ何かを決心したのか口を開く。

「お主はいずれ自分の矛盾を見つける、そしてその矛盾が無くなった時……お主は全てを知る」

おっさんの言葉の意味が分からなかった、けど将来何かがあると言う事だけは分かった。

「……それだけ？」

「いや、むしろ……お前さん、何か写真のような物を持ってないかい？」

写真？　そういやこの前撮ったっけ？

「あるけど……」

「それを見せてみい」

言われるがままに出して見せる。

「……この写真の場所以外にもこれと同じ物が後三つある、そこに行くといい」

「その場所って？」

この場所以外にも同じ物が？気になるから行って見たいと思う……
…それに何故か知らないけど惹かれる。

「滋賀県にある琵琶湖、北海道にある洞爺湖、そして最後に行く富士山じゃ」

「なるほど……」

確かに言ってみる価値はありそうだね。

「でもなんで富士山が最後？」

「そこに三つのある物を持って行く必要があるからじゃ、詳しくは分かんが夜明けじゃないと意味が無いらしい」

何かあるのか？でもまあ行ってみる価値はありそうだな……。

「そうか……じゃあ行ってみるよ」

「ホッホッホ、気をつけてなあ」

取り合えず行く前に食事を取らないと……。
そう言って二人と一緒に連れて行く……そうだ……

「おっさんも一緒に」

後ろを振り向いた時、既におっさんは居なかった。

女の会話（前書き）

今回も厨二にご都合主義……………。
できれば主人公を不幸にしたい！

次回は外伝やります。

女の会話

「……………なんだったんだあのおっさん」

あの後探したけど結局見つからなかった、でも何で急に消えたんだろうか……………？

転移魔法は……………違う、それにあれば時間がかかる。レアスキル……………多分それだと思う。魔力は多分無かったと思う。

まあいいか……………、不思議なおっさんだったけど悪い感じはしなかったし……………。

「それよりも……………」

ぐぐ、と腹の音が鳴る。そう言えば今日は朝しか食ってない……………。

「何を食べようか……………」

出来れば魚料理じゃないものを食べたい、肉とか野菜とか……………。ぶっちゃけ中華を食べたい、だけどここはレディファーストという事でフェイトに食べるお店を選ぶ権利を譲ろうと思う。

「ねえフェイト、何が食べたい？」

「私はいいいよ、オウカが選ぴなよ」

「いや、ここはフェイトが……」

「いや、ここはオウカが……」

お互いに譲り合う、でもフェイトが良いと言ったから選ぼうかな。

「なあオウカ、フェイト!!」

そう思っていたらアギトが僕の服の裾を引っ張って声を上げている。

「どうしたのアギト」

「私あれが食べたい!!」

そう言ってアギトが指差すのは日本の文化、そして外国にも知れ渡る由緒正しいジャパニーズフード寿司。

どうやら僕は今日も魚料理以外を食べられないようです、くそ……
こうなりややけ食いだ!!

そう心の中で呟きながらお店に入った、お店の中は一般的な回転寿司。

行列は無かったが混んでいた為十分くらい時間がかかるらしい、席が空くまで椅子に座る事になる。

その間にフェイトと少し話をしよう。

「そういやフェイトってかなり綺麗だね、それに可愛いし」

「……………か、可愛い？」

少しだけ、顔を赤くした。

まあ素直に褒めているからね、僕は鈍感でもないしそれ位の事は分

かる。

「きつともてるんだろうね」

「……大変だよ、もてるのって」

フェイトが何か色々と諦めたような顔をする…………。

「な、何があったの？」

「変にイケメンな人とか女顔の人に毎日のように『俺の物にならないか?』とか言ってくるし…………しかも凄い大声で『嫁キター!』とか言うんだよ、街中で」

「うわぁ…………」

そりゃぁ酷い…………というより現実に居たんだな、そんな痛い奴…………。

「嫁キター!!」

…………実際に居た、そして今僕の目の前で起きたよ。今明らかにこっちを見て変な大声をあげる物凄い残念なイケメンの男がこっちに近づいてくる。

フェイトの顔が青ざめている、アギトもなんか汚物を見るような目でその男を見ている。

周りのお客さんも何事かと男を見ている、男は顔を赤らめてこっちに、正確にはフェイトを見ている。

「本当に居たんだね、半信半疑だったけど…………」

「……うん」

フェイトが嫌そうな顔をしている、と言うよりは変な物を見る目で
見ている。

「フェイト、あれ殴って良い？」

フェイトが可哀想になったから、本心は目障りだから殴りたい。
そして視界に二度と入れたくない。

「………」

無言のまままだ、それだけ嫌なんだろう。

そう思い立ち上がりその男の前に立つ、僕より頭一つ大きい男はフ
ェイトに近寄ろうとするが僕が遮る。

「おい、邪魔ッ!!?」

最後まで言わせることなく水月に拳を入れる、男は腹を押さえなが
ら僕の肩を掴む。

力も全く無い、鍛えてなかったんだろう。

「て、てめえ……!」

「うるさい」

次は金的。

「あひい!!?」

「もう眠れ」

そして最後に顎にアッパーを決める。

男はそのまま倒れる。

僕はその男の足を掴み外に出て辺りを見回す。

そしてある人を見つけその人の所に行く。

「あのー、すみません」

「あらあー？何かしらボクウー」

服の色がくどく女物で、不自然な金色の長髪に化粧しているが目立

つ顎鬚の男性。

つまりオカマに話しかけた。

「この人が貴方に惚れたとか言っていたので」

「アラァー！！嬉しいわねえー」

「それで目が覚めたら貴方と言えない事をしたと言っていました、目が覚めたらで良いですが」

「本当なのおー！」

「ええ、ですから預かってください！」

「分かったわー、貴方もどーう？」

「僕は遠慮しておきますよ」

そう言って立ち去り、すし屋に戻る。

そして何事も無かったかのようにフェイトの隣に座る。

「……大丈夫だった？」

「うん、ああ言うのを制御できそうな人に渡してきたから」

『な！誰だアンタ！！？』

『あらゝ、照れちゃって可愛いわねえゝ』

『よ、よせ！！やめろ、やめろおおおおお！！！！』

『ンゝ』

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！！！！！！！！』

外からさっきの男の声とオカマの絶叫が響いた。

「……………大丈夫だから」

「絶対に大丈夫じゃないと思う」

フェイトは優しいなあ、アンナ奴を心配するなんて……。つかお店
の中で大声あげる？普通。
っと思うだそうだ。

「フェイト、これさっきの奴が持ってた物」

そう言っ一つ一つの石を渡す、その石は綺麗に光る石だった。

「ッー！これってデバ」

「しー……」

「ごほん……デバイスだ……なんで持ってたんだろう」

「分からないけどフェイトに渡した方が良いと思って持ってきておいた」

「うん………だけどなんで管理外世界にデバイスが……」

それは恐らく転生者だからです、すみません。

同じ転生者として恥ずかしい………、一歩間違えば僕もあんな風に………。

「まあ良いけどさ、席空いたみたいだよ」

「あ、うん」

そう言っフェイトとやアギトと一緒に立ち上がる。

場所はカウンターで三席空いている、そしてその席に座る。順番は右からアギト、僕、フェイトだ。

そして会話をしながら寿司を取って食べていく、焼き魚や刺身とは違った美味しさを楽しめた。

そのまま時間をかけたらいらげ、そのままお金を置き店を出る。

その時に白目を向いていたさっきの男がオカマに何処かに連れて行かれていたけど無視した、もちろんフェイトやアギトには見せないようにした。あれは刺激が強すぎる。

「で、寝る場所何処にする？旅館？ホテル？野宿？」

「何で野宿も……」

「まあこれは最後の手段だから気にしなくて良いよ」

「……じゃあホテルで」

「了解、でもどうするの？男と女じゃあ同じ部屋を借りるのはちょっと……」

流石にホテルの部屋を子供が二つ借りるのはちょっと気が引ける。まあ僕は野宿でも構わないけど。

「ううん、部屋は一緒に借りるよ」

は？

「何で？僕男だよ、女顔でも男だよ。それに体格だって良いし……」

「オウカがそんなことしない人だって信じてるから」

いや、僕は貴方が思うほど綺麗な人間じゃありません。

「だからって……」

「それにアギトも居るし」

「大丈夫だぜ！オウカは信頼できるからな！！」

「いやでも…………男と女とか…………」

「じゃあ行こう」

「話を聞いて」

結局僕の話は聞かれることなくそのままホテルで一緒の部屋で泊まる事になった。

「全く、こんなのじゃあご都合主義だ」

お風呂に響くのは声…………。

ビジネスホテルにある風呂を使っている、お湯の温かさが体に染み渡る。

「…………髪長いな…………」

何年も切っていなかったらこうなるか…………、短くしよう…………前世のように、って前世はどんな髪形してたんだっけ。

まあ何年もたてば忘れるよね普通。

『……で、何で一緒のホテルにしたんだ？』

外からアギトの声が小さいが聞こえる。

少し静かにして聞く、アギトはあんな姿をして子供っぽいがこの体よりも長く生きている。

もしかしたらフェイトよりも年上かもしれない。

『……なんていうのかな？この人はそんな事しないと思ったんだ』

信頼してくれるのは本当に嬉しいけど僕は貴方が思うほど優しい人間じゃない。

『でもさあ、オウカが言ってたけど男と女だよ、それに性格少し変だし』

否定はしないけどアギトが裏で僕の事をどう思っているのか分かった、否定はしないけど。

『まあ確かに性格変だし容赦ないけど………』

酷い！！出会ってから一日も経ってないのにそんな評価をするなんて！！

『……嫌な感じがしなかったんだ』

『嫌な感じ？』

『うん、さっきの男の人が良い例だけど………大輝が殺人をした所を見た後に逃げ出したんだよね』

今フェイトの昔話を聞いている、と言うより何でこんな重い話に？

『その後魔導師に会ったんだよね、何人ものね。その全てが協力してやるとか言っていて……嫌な感じがしたんだよね……私を物のように見ているとか……そんな目で』

また転生者が……つーか馬鹿ばっかだなおい……。

『しかも全員が戦いだして……アルフと一緒に逃げて……なのはと会ったんだ、その時も大輝と会って分かったんだ、酷い目をしてるって』

『そうか……』

『それで大輝とだけは距離をとってるんだよね、だけどたまにカッコいいなと思っちゃう時がある……』

大輝はニコポ、もしくはナデポを持っている。

だけどフェイトはそれを自分の思いだけで跳ね除けてるんだ。

ニコポやナデポは誰だろうと惚れさせる能力だと思っているけどそれは違う、主人公に憎しみを持ったまま死ぬ敵キャラも居るように心で決まる。

言ってしまうえば心の持ちようでは耐えられる、だけど大半が気付くことなく堕とされる。

フェイトはそれにも無自覚ながらも気付き耐えている、凄と思う。

『けどだね、その度に思うんだ……なんで人を殺したのって……』

『そうか……………』

好意を持っていたても失望する、フェイトが墮ちないわけだ。

『それに自分が自分じゃなくなる感じが嫌だった、そして許せなかった……………なのは達には表面だけよく見せて隠れて酷い事をしていく大輝が……………』

どれだけ表側を良くしたって所詮は偽りの物だ……………いつか剥がれ落ちる。

たとえ酷くても本性を出しておけば良かったんだ、あの野郎の力なら不条理を変えることも出来る能力がある、フェイトも裏切ることには無かったのに。

『まあその点オウカは隠すのが下手だしな、すぐに顔に出るし』

え、そんなに出てたの？ 僕って……………。

『うん、ユーノや義兄さんのように嫌な感じはしなかったからね』

いや、だから僕は……………

『それに一緒に話していて楽しかった、言葉は色々矛盾してたけどね』

『そうだな、ハハハ』

「僕って……………僕って……………」

僕は周りの人からヘタレとでも思われているのかなあ……………。

P V 五万達成 小学校（前書き）

本当は三万の予定でした。

でも書いてる途中に……そして短いし意味不明です。
それでも良かったら見てやってください。

PV 五万達成 小学校

あー、暇だ…………。

僕こと高町オウカは転生者だ、正確には憑依者が合ってるけど。一応リリカルなのはの世界、僕のほかにも転生者は居るけど…………全員チート能力もちなんだよね…………。

高町の姓を名乗っているけど実は養子、理由は実験が嫌になって逃げ出したらフェイトに助けてもらったこと。

本当はハラウン姓になる筈だったんだけど高町親子に引き取られた、なのはが弟欲しいとか言っていたからとか…………。僕って弟？

まあチート転生者でオリ主である神崎大輝には絶賛睨まれています。ヤバイです、朝っぱらから僕の胃袋が破れそうです。そうになったら胃液が肉にかかって痛そうだなあ…………。

そんなことを考えてたらフェイトが近寄ってきた。

「お早う、オウカ！」

「お早う、フェイト」

フェイトが笑顔で僕に挨拶する、僕もフェイトに挨拶する。にしても本当に可愛い笑顔だなあ…………。

「席に着いて下さい、HRを始めますよ」

先生の号令で生徒が席に座る。

こうして、今日も一日の生活が始まる。

「俺と戦え！高町オウカ！！」

あれ？どうしてこうなった？

今は体育の時間、何をしていると思います？

ドッジボールです、はい。それでフェイトに応援されました。

あ、理由分かった。

「えー！！嫌だあ！！」

まあここは子供っぽく……。

「どうせ僕が勝つもん」

「」「大輝、お前に味方しよう」「」

あれ？何で？手っ取り早く済まそうと思ったのに……………

「いや、今の言葉が原因だからね」

あ、また口が滑ったのか…………。

はあ、面倒くさい…………海に潜りたい…………。

「それじゃあ試合開始！」

ああ、先生！！お願いですから試合だけは！！

「はあ……………なんでだろうね…………」

「くそ…………くそ！！」

向こうのチームが僕にしか狙わなかった為こっちのチームの被害は少ない、それに対し大輝のチームは大輝一人しか残ってない。

向こうは転生者と言えど体はただの人間、でもこっちはクローン……しかも生まれる前から強化されている。

やっぱり基本性能の差って大きいよね、戦い方以前に。

「じゃあこれでお仕舞い」

そう言って投げる…………。

これでやっと終われる。

「同調開始」

はっ？今何言いやがった？

しかもキャッチ……………、あんにやろう…………チート能力使いやがったな…………。

「はっ！勝負はまだこれからだぜ！！」

そう言っであの馬鹿がボールを投げる、それをかわす。

——ゴッ！！

「うう…………」

後ろの少年がぶっ飛ばされる、ちよつと待て……………ボールにも強化してんの！！？

「おい……………」

「お前には勝つ、それだけだ」

本当にこいつオリ主？

なのは達も少し驚いているぞ……………。

「がんばって！！オウカ！！」

フェイトが僕を応援してくれるのは嬉しいけど…………。

「まあ勝ちに行くか…………」

少し卑怯だけど。

「来い、次お前が投げた時が……最後だ」

かっこつけてるな……。

「まあ良いか」

そう言ってボールを投げる、ボールはさっき投げた速さより少し遅い。

「馬鹿か？何で少し遅く……」

そしてボールは大輝の手に収まる……瞬間に落花した。

「なっ!？」

落花したボールはそのまま大輝の足にぶつかり地面に落ちる。少しの間周りが静かになるがすぐに歓声になる。

「すげー!! チェンジアップじゃねえか今の!!」

「俺達の勝利だぜ!!」

「あの大輝に勝ったんだ!!」

周りが喜んでるけど、向こうは……。

「やっぱり大輝じゃだめだよなあ」

「性格やルックスは勝ってるのになあ」

「なんでフェイトさんはあんな奴に」

「くそ!! 何で負けたんだ!!」

結局こうなると……、なんか勝った気がしない。

「はあ……今日もめんどくさかった」

「そう言わないでよ」

放課後になって掃除しフェイトと一緒に帰る、何も変哲の無い日々。

「フェイトも俺より大輝の方が良いんじゃない?」

ふいにこんな事を言ってみた。

「……大輝は何か変」

「何か言った?」

「何も言って無いよ」

「……………なんだ夢か」

目が覚めるといつもの岩肌が見えた。

「もしも僕が原作キャラに会っていたら……………まああくまで可能性か」

それよりも先に殺されてたと思う。

「おい！！起きたかオウカ！！」

「うん、起きたよ」

そうだ、あんなのは夢だ。

僕が原作キャラに会えるわけ無い、会おうとしても殺されるだろうが……………。

まあ向こうから来ない限りは……。

——それから数日後、僕は原作キャラと転生者に会うことになるのだが……。

旅に必要な物は移動手段と追跡者、追跡者は要らなくない？

「ふっ！ふっ！！」

いや、朝から素振りって言うのは良いね！体を動かす事は本当に楽しい、できれば海に潜りたいけどここに海は無い………残念だなあ。

まあ良いか、すっきりしたし。

「戻るか」

そう言ってビジネスホテルに戻る、その時に昨日居た転生者に会った。体中にキスマークが付いていて死んだような目をしてこの世の終わりのような顔をしていた。

しかも服が所々破れていたり変な液体が付いていたけど………。

うん、何があっただろう。

でも僕のせいじゃあないよね、うん。

そんなことを考えていたら何時の間にか自分の部屋の前に来ていた、テンプレならここで着替えていると言う感じだけど………そんなことはあり得ない！！

「……ただいまー」

扉を開けると布団に入って何かを見ているフェイトが……。

「あ！う、うんお帰りオウカ………」

フェイトは見ていた物を隠しこっちを見た、明らかに動揺していた。

「何を見ていたの？」

そう言ってフェイトに近づく、それに反応してかフェイトが後ずさりをする。

「べ、別に何も」

「あ、胸の谷間が見える」

「嘘！？」

ふ、引っ掛かったな。

フェイトが右腕で胸を隠してる隙に左腕に持ってた物を見る。

「だ、騙した！！？」

「騙される方が悪い、とは言わないけど」

そう言いフェイトが見ていた物を見る、それは写真だった。
写っていたのは十人程度の科学者………って……。

「これまだあったんだ」

これは一番最初の頃の……僕が作られた一番最初の頃の科学者達だ。

「この頃はまだ酷い実験じゃあ無かったな……それに人間扱いだったし」

「……ああ……」

何時の間にか居たアギトも頷いていた、この頃はまだ楽しかった。

「……オウカ……この写真の人たちは……」

「ああ、僕を作った科学者達だよ……今じゃあ一人しか生きてないと思うけど」

「……昨日言っていたマナさんってこの人？」

フェイトが指差すのは一人の女性、綺麗な薄紫色の髪に橙色の瞳、目は鋭いが写真でも伝わる優しそうな雰囲気がある女性。

「……そうだよ、マナ・リルクライト……僕を作り出した研究の第一人者……そして僕のお姉さんだった人」

「……本当に優しかったな……私もこの人に助けられたんだ」

この時はあくまでも作る事だけだった、聖王を復元して……ちゃんとした大人に育てるという感じだった。

「うん、作られてから二年間は本当に楽しかった……あの事件が起きる前は」

「あの事件……？」

「……………聞きたい？」

「……………うん」

「そっか、じゃあ……………次回に続く」

「何で!？」

この話はいくらも言いたくない、同情されるのが嫌なのもあるけど……………絶対に止められるから……………。

本当ならずとここに住んでいる予定だったけど……………管理局預かりになったから関わらないといけないのか、僕がフェイトにスカリエッティの事を被害者とか言ったらスカリエッティに恨みが……………無くなった？わけじゃあ無いかもしれないけど……………まあ結局僕がフェイトに言う資格は無かったただけだ。

「……………それよりも」

そう言って買ってきたサンドイッチと牛乳を渡す。

「朝ご飯だよ」

朝食を食べ終わった後ビジネスホテルから出て街を歩いていた。

正確には歩いて隣町に移動するのだが……。

またあの転生者に出会った、だけでもう二度と使い物にならないだろう……あのオカマと一緒に手をつないで歩いていたし、何か目が真っ白い粉を使ってる人みたいに逝っちゃった目で笑っていたからな……。

「えへ、エへへへ……」

顔を出来るだけ会わせない様に歩いてその場から100mくらい離れたらフェイトが口を開いた。

「何で昨日絶叫が聞こえたのか分かったよ」

いや、僕には分からない……チート能力があるのに何で魔法を使えない一般人に負けたんだろう……。

デバイスが無くて能力が……そういやニコポやナデポって男にも効くんだったけ？

効いたらいやだな……。
って……

「…………フェイト、少し走るよ……」

「え？」

僕はフェイトの手を引っ張り人通りの多い道に行く……。

「一体どうした」

「管理局の白い悪魔、キング・オブ・デーモン事高町なのはに管理局の若狸事八神はやてが居た」

「……その二人の名称についてどうかと……」

「でも結構呼ばれてるよ、科学者達も言ってたし」

フェイトは僕が今言った言葉に苦笑いする。

「でもなんで人通りの多い道に？」

「理由は二つ、人通りの少ない道に行けば見つかる可能性が高いから」

人通りの少ない道って人が少ないから分かりやすいし、行き止まりがあったりする。

そうなると即戦闘勃発、僕はあの二人なら戦って勝てる自信があるけど……。

「それに管理局のオリーシユ、妬ましいぞこのハーレム野郎事神崎大輝も居たし……」

「……一応聞くけどその異名ってオウカが考えた事じゃないよね……」

「いや、マジで僕じゃない……フェイトにも異名が」

「聞きたくない」

「だよね」

うん、本当に酷いからね……残りのあだ名……。

「まあもう一つの理由は木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中って言うわけ」

まあこんだけ多ければ分からないだろう、小説や漫画なら分かるだろうけど……。

「でも少しくらいは変装した方が良いかなあ？」

僕はそう言うのと急ぎ足でこの場から立ち去る。

その後見つかる事も無く何とかバレずに隣町に行く事が出来た。

「……疲れた……」

本当に疲れた、周囲を警戒しながらここに来るのには本当に神経使ったし何より遠かった。

他の移動手段があれば……。

「あ、これ良いな」

目に止まった物は自転車だった、何故か惹かれる……訳じゃないけど何故か欲しい。

それにデバイスの中に収納できるし……うん、これ買おう。

「すみませーん」

そう言ってからお店の中に入った。

「いやー、楽だね！！歩く必要ないし頑丈だし」

「かなり高いのを買ったからだと思うんだけど……………」

フェイトが僕の買ったもう一つの自転車に乗ってる。アギトは小さくなりフェイトの服に入っている。

そして何故か寝息まで聞こえる、アギトってあんな性格しているのによく寝るんだよなあ。

「さてと……………、ここから一番近いのが……………琵琶湖だったよな」

ポケットから取り出すのはミミズのように汚い字で書かれたメモ。

「じゃあ行くよ、フェイト」

「うん、分かった」

今思えばたった一日の出来事だった、たった一日で原作キャラに会い神崎大輝と戦って……………本当に何でこうなってしまったんだろう……………。

「あ、道逆だ」

「.？」

旅の途中にトラブルがあるのは常識？（前書き）

疲れた…………豆腐になりたい。

s t S 編どうしよう…………。

原作どおりやるかオリジナルでやるか…………。

旅の途中にトラブルがあるのは常識？

はあい、MY自転車・命名プロミネンス号を買った僕はただいま……。

周りにある風景は森、地面はぬかるんではないが水気を帯びている整備されていないでこぼこだ。

しかも雑草大量に生えていたり石やら岩やら大量にあり木もかなり生えている。

それで地面は斜めに……場所は山。

賢い皆様なら分かりますね、僕達……。

遭難しました。

「やっほー!!」

「やっほー!! じゃないよ!! 何遭難してるの!?! と言うより何で私達はこんな場所に居るの!?!?」

フェイトが壊れた、まあしょうがないか……。

「あんな事があったからね……………」

「…………何」

まあフェイトはさっきまで気絶していたからね……………、僕も聖王の鎧が無かったら骨が何本か折れてたし……………。

「まあぶっちゃけフェイトの自転車がスリップして一緒に投げ出されて僕がフェイトを庇ってそのまま落ちた」

「じゃあつまり」

「今回もフェイトが悪い」

「今回も!?!もしかしてあの無人島の事も含まれているの!?!」

「いや、遺跡の罠」

「…………私ってドジなのかなあ」

まあ嘆くな、自転車は無事だったんだし……………。
でもまあ……………。

「この山を下ればきっと琵琶湖に着くはずだから……………多分」

「そんなフォロー要らないよ……………」

「そう?」

まあ何となくだけど山を下っていけば道には出るはずだ。楽観視し

ても良いんじゃないの？

そう思っていた時期がありました。

それから数時間後……まだ山の中を下っていた。

「ねえ……やっぱり怒って良い？」

「……………ごめん」

ゴメンで済むなら警察は要らない、少しでも樂觀視した自分とあんな所で転んだフェイトを殴りたい。

「はぁ……今日は野宿か……」

フェイトやアギトには悪いけど今日は風呂無しで我慢してもらおう……。

「まあもう少し先に進んでもうちよつとだけ平らな地面を見つけるまで歩く事になるけど」

大丈夫だよね、と言いフェイトを見る。

フェイトは顔を逸らして頷く、人の話を聞くときは顔をこっちに向けなさい。

怖くないよ？ねえ、怖くないヨ？

「いや、今のオウカ……メツチャ怖いから、夜に怖い物とかに会った時のように」

アギトがフェイトをフォローす、だけどねアギト。怒るときにはき

つちり怒らないといけないんだよ、だよ？

「……………そういやアギト二年前に」

「ごめん、フェイトが悪いです。怒ってやってください」

「アギト!？」

フェイトはアギトが裏切ったので驚愕する、残念だったな……………アギトの黒歴史を言えばアギトをこっちの味方にする事なんて簡単なんだよ。

さてと、じゃあまずは顔をコッチに向けて目をあわせてさ、お話しようよ。

「サテトふえいと、キツチリ話ソウジャナイカ」

「ひっ!……………ってオウカ……………後ろ」

フェイトは僕の後ろを指ざした。

僕を騙そうとして……………そんなんじゃないよ……………ってアギトまで……………。

ちよっと待って……………この感じ……………嘘、こんなテンプレ要らないよ。誰かに上げるからさあ……………貰ってよ!!

僕は後ろを振り向いた、そこに居たのは熊だった。

「グルルル」

間違いなく熊ですねハイ……………。

何でこんなテンプレが……はつきり言っちゃあ要らないですこんな物。

熊はそのまま爪を振り下ろして……右腕から鮮血が飛び散る。

「…………今日の晩御飯は決定だね」

まあ僕が刀を使って切り落としただけなんだけどね。

この程度ならバリアジャケットをまとう必要が無いし。

「フェイト、目え瞑ってて」

流石にこの光景は見せるわけにはいかない……管理局の人間でもフェイトは女の子。

この光景はきつ過ぎる。

「グルルルアアアアアアア」

「はい、これで終了ね」

そのまま首に刀を振り払う。熊は頭部がズレ落ちそこから血を噴出す、熊の体が倒れ血だまりを作る。僅かに痙攣していたもののすぐに動かなくなった。

僕はその熊をデバイスの中にしまう、このデバイスは他のデバイスと違って色々な物質を収納し保存する事ができる。化学実験の為に作られた貴重な物だ、と言っても他の性能は普通のストレージに比べれば僅かに劣る。

「もう目開けて良いよ」

「……………殺したの？」

フェイトが辺りを覆う血の臭いに顔を顰めながらそう言う。

「うん」

「……………よく血の臭いが平気だね」

「慣れているからね、主に自分の血で」

「……………ごめん」

「もう良いよ、何か熊に出会って興奮して逆に頭が冷えたから」

というよりどうでも良くなった。

めんどくさくもなかったしこんな事で怒るのが馬鹿馬鹿しくなっただけだ。

「……………はぁ……………何時になったら琵琶湖に……………」

今の時間帯なら着いている筈だったのに……………。

「……………ねえ、そのデバイス……………光ってねえか？」

「え？」

アギトに言われて見れば少しだけだけど光っている。

「……………これって、この前観測したロストロギア反応だ……………かなり

微弱だけど」

フェイトがそう言う、やっぱりロストログアみたいな物だったか。

「でもこれって魔力じゃない、魔力よりも強い力だ」

フェイトは刀を見て考え

「これ何処で見つけたの？」

そう言った、まあ僕も知ってるし……。

「海で落ちてた、そしてそれに触ったら……いきなり爆発して……
その後にデバイスと融合した」

「そう……」

フェイトは口を押さえる。

「……もしかして」

フェイトが唐突に呟き、この刀を掴む。

「ねえ、一回魔力を使ってみて！」

「う、うん」

そう言われて魔力を使ってみる、その瞬間刀は光り輝く。
その数秒後に一キロ位離れた場所に光の柱が立つ。

「あ、あそこにロストログア反応が!」

フェイトがそう叫ぶ。

「ちょっと待って、と言う事はこれと同じ……」

ロストログアがある。

そう思ったら吉日。

光の柱を目掛けて魔法を使い空を飛ぶ、何で使わなかったかって？
あまり使いたくないんだよ、これ使ったら管理局が来そうだからね
……。

そして到着し地面に足をつける。

刀はまだ光り輝いている、だけど光の柱は無くなっていた。

「まあ探す前に……」

フェイトと僕のお腹から音が鳴る。

「腹ごしらえだね」

そう言う僕と僕はデバイスから熊を取り出す。

「フェイトは薪となるような物を集めて来て、アギトは鍋とかに水
入れて暖めておいて」

そう言って二人をどこかにやる。

その後僕は熊の皮を剥ぎ、肉を切り骨を取り出す。内臓などを抉り

取り肉だけを取り出す。

あたり一面は血に濡れていた。

「まあこれで良いでしょ」

そして肉を水洗いしアギトの所に持っていく。

「お、もう終わったのか」

「アギトはまだ？」

「ああ、まだ薪が無いからな」

「じゃあ僕は潜ってくるから」

「またか……まあ良いや」

アギトから許可を貰い湖に飛び込む、もちろんバリアジャケットを着てだ。

「（結構魚がいるなあ）」

魚を取り出した銚で突く。

そしてそのまま一匹だけ持ち帰る。

「ただいま」

「早かったじゃねえか」

「……湖って冷たいね」

海とは比べ物にもならないほど冷たかった……………それこそ凍えるか
と思うくらい。

今の季節は秋、うん……………寒い。

「薪持って来たよ」

お、ちょうど良いところにフェイトが帰ってきた。

フェイトが持ってきた薪で温まろう、うん……………そうしよう。

熊鍋＋真鯉を平らげた僕たち三人。

「よし、じゃあ探そう」

当初の目的に戻って遺跡を探す、本当にあればだけど……………。

そのまま僕とフェイトはバリアジャケットを纏い、僕はアギトとユ
ニゾンする。

「何処にあるのかな……………」

あたりを見回しながら石を退けたりする。

「そうだ……!!」

フェイトがデバイスを構えて結界を張る。

「何してるんだよ!! 管理局にばれるって!!」

「まあそうかもしれないけど……でも分かったよ」

フェイトはバルディッシュをある場所に向ける、そこには岩がおい
てあった。

「あれ魔力を遮断してる、でもなんで管理外世界で……」

「まあ昔は在ったんじゃないの? 魔法がさ」

フェイトの疑問にそう言い岩を押す、魔力が効かないとなるとあの
力で破壊するか純粋な力で……。

「……重いけど退かせない事はない」

そのまま押し人が入れるぐらいの隙間を作る。

「フェイトー、中に入るぞ」

「あ、うん!!」

そう言って中に入る、その場所は階段だった。
その階段を下る、そして刀が強く光り輝く。

「やっぱり、近づくと共鳴するのかな」

そして階段を下り終えると一つの空間があった。
その空間には台座があり、壁には一番最初の遺跡と全く同じ物が書かれていた。

違うところがあるとすれば光り輝く綺麗な勾玉があると言う事だ。

「何……これ」

そう言ってその勾玉に触る、この前の暴発が起きない様に魔力でコーティングしてから触った。

勾玉はデバイスの中にそのまま吸い込まれバリアジャケットに装着される。

場所は胸の中心だ。

そして気付いた。

「これ、三種の神器だ」

「三種の神器？」

「詳しい事は分からないけど神様に渡された物だったはず、剣・鏡・勾玉の三つで……」

じゃあ何？この刀って本物の天叢雲剣？確か水没説もあったから……。

「ちょっと待って、残りの遺跡には……鏡だよね……」

じゃあ富士山は一体何なんだ？

「…………ここに居てもどうしようもない…………一旦戻ろう」

「…………そうだね」

ただでさえ魔力を消費しやすいんだ、それにここで魔力を使った攻撃は無効になる。

僕達はこのまま遺跡を後にし…………上を目指した。

「…………戻ろう、オウカ…………」

前に居るフェイトがそう言う。

「大輝が居た」

その瞬間下を目指し元の場所に戻る。
そして壁に向かいレアスキルを発動、体中の苦痛に耐えながらも壁を破壊しフェイトを抱きかかえ走る。

「何で私を抱きかかえるの?!」

「だってフェイトは罨に嵌る、絶対」

そう言うフェイトが項垂れた。

「フェイトちゃん!待って!!」

そう言ったけどフェイトちゃんはそのまま戻っていく。

「待ってってばー!!」

そう言いレイジングハートを向ける。

少しだけ………痛いの覚悟してねッ!!

「ディバイーン………バスター!!」

それはそのまま岩に当たって………消えた………。

ってええ!!!?

「何で消えちゃったの!?!」

「なのはどけ!!俺が壊す!」

「大輝君!」

大輝君ならあれを壊せる、私達もそう信じていたの。

「偽・螺旋剣!!」

大輝君から放たれた剣はそのまま岩に辺り衝撃を生んで消えた……。

「な、何でだ!!?」

そんな……大輝君でも壊せないなんて……。

「……なのはちゃん、私達がフェイトちゃんを説得するで。私達があそこに入ってたのはちゃんと大輝君は外で見張ってて」

はやてちゃんたちがそう言っであの岩の隙間に入っていく……。

「なのは……俺達は待ってよう」

大輝君が肩に手を乗せてそう言う。

うん、そうだよね……はやてちゃんたちを信じよう。

「ゲホゲホッ!! やっぱ痛いモンは痛い!!」

必死で痛みを我慢して進み遺跡の外に出る、後ろには誰も居ない。
ここじゃあ魔法を使えないから自分の能力だけで進まないといけな
い…………。

「でも出口は見えたよ!!」

「ああ、全く……風が来る方向であってたな、寒かったけど」

よし、このまま外に出て逃げよう。

そして外に出た。

「よし、今のうちに」

「逃がさねえぜ」

「ッ!!?」

やば、転移してきたな…………。

相手は高町なのはに……神崎大輝。

「さあ、フェイトを開放しやがれ。このクズ野郎」

論破って考える相手に聞くものであって考えない人には聞かなくない？ぶっち

少し難産でした。

おかしい所があったら報告してください、修正しますので。

論破って考える相手に聞くものであって考えない人には聞かなくない？ぶっち

「覚悟しやがれ、このクソ野郎」

目の前に居るのはあの神崎大輝、間違いなく俺を殺す。もしくは再起不能にするつもりだろう。

全く、嫌な奴だ……こういう奴にはあんまり関わりたくないんだけどね。

「てめえ……オウカをクソ野郎だって！！ふざけんな！！」

アギトがユニゾンを解除してアイツに反論する。

アギトを見たアイツの顔が変わり優しく笑っている。

だが目が冷徹で酷く濁っている。

「君は……無理やり従ってるんだね」

優しく言う、だけどアギトには侮辱でしかない。

アギトは幼い子供のようだけど実際は頑固だ、自分の大切な物を踏みにじったりすると怒る。

僕はそんなことはしてない、態々怒らせたくも無いし。

「あんな奴に従わなくていいんだよ」

「もう良い、その口開けるんじゃないクソ野郎」

アギトが大輝に対してそう言う、大輝は驚いていたがすぐに戻る。

「私のマイロードオウカはな……意地悪だし馬鹿だけどなあ……そんなに酷い奴じゃねえンだよ！……てめえのような人を人として見ないような奴と違ってな！！」

「アギト………」

アギトの言葉が嬉しい。

僕には勿体無いほどの相棒だ。

「オウカ、私はお前のように管理局員が全て悪い訳じゃないのも知ってるけど怖かった、でもフェイトは優しかった、大好きになった。けどアイツは違う、あの研究員に比べたら失礼だけど………それでも同じクズには変わらない」

「………」

「だからさ、今は敵わなくても……いつか絶対に倒そう！」

「ああ」

だけどアギトだって分かってる、今の僕達ではあの神崎大輝には敵わない。

精々一泡吹かす程度しかない。

だから、今ここでは逃げる。

ここで逃げられれば……いつか必ず闘って勝つ機会を得られる。

「フェイトちゃん………」

「……なのは」

隣ではフェイトと高町なのはがみつめあってる、言葉だけ聞けば一部の人間が喜びそうなシチュエーションだが決してそんな場面では無い。近い物なら泥沼の三角関係のような感じだ。

フェイトからは申し訳ないように感じるオーラを、高町なのはからは……何て言うのだろう。

一番近いのは物語の最後の敵に体力を死ぬ寸前まで削られるような感じだ、笑いたくても笑えないよ。

「フェイトちゃん、なんで……」

「……理由は言えない、それに話しても信じてもらえない」

そう言っただけフェイトは高町なのはにそう言う。

高町なのは達とフェイトで違う物……それはニコポに抵抗できるかどうかだ。

だからこそ、ちゃんと話しても理解したくないと言う気持ちがある為転生者のそんなことはしない等と言う言葉に騙される。

「フェイト……大丈夫だ、ちゃんと信じろ……俺達は仲間だろう？」

大輝がフェイトに笑いかける、何故かそれがおぞましく……拒絶反応が出そうなほど汚い笑いのように見えた。

「……私、知ってるんだよ……私がジュエルシードを奪取する為に地球に来たとき……路地裏で」

「フェイト、お前は疲れてるんだ……それにそんな奴と一緒に居るから……」

話を無理やり逸らした、なのはもう少し様子が変だって気付いている。そりゃあ気付くよね、あんなにまで顔が歪んでたんだから…………。

「……フェイトを洗脳した罪は重いぞ」

「何でそうなるのかな？」

まあそうだよね、一般的にはそう考えるよね。

今まで仲が良かった友人がこんな反応をしたら…………おかしいとは感じるよね…………。

でも洗脳は無理がある、しようと思えば僕でも出来るけど時間が無い。

「悪いけど僕はフェイトを洗脳したわけじゃあ無い、彼女が自分の意思で僕と行動を共にする事を選んだだけだ」

やっぱりここは反論させてもらう、好き勝手言われるのは嫌だから。

「それに僕はフェイトの許可無く戦っちゃいけないからね、戦闘は出来ないけど」

「…………てめえ」

明らかにドスのある声を言う。

隣の高町なのはも怯えてるぞおい。

「で、でもロストログアを！」

「それに僕は管理局預かりの扱いだ、だからこそロストログアをフェイトと一緒に回収してるんだよ。それに今の僕は時空管理局に保

護して貰っている以上時空管理局員と一緒に行動した方が良いしね」

「なら何でフェイトと行動するんだ!!」

「それは愚問、俺がフェイトに頼んだしフェイトがそれに了承した。それにフェイトに頼まれごとしたし……」

「ふざけんな! どうせお前が洗脳でもしたんだろう!? フェイトはプロジェクトF・A・T・Eで生まれたんだからな、どうせそれが目的なんだろう!!? ああ!!?」

逆ギレされたよ。

なんかもうメンドクサイ……話したくない。

「悪いけど僕もそのプロジェクトで作られた産物だから」

「さっきからオウカを馬鹿にしゃがって……てめえは一体何様だ!!? 管理局様か!」

なんかアギトまで参加してきた、でもはつきり言ってしまうえば論破
なんかメンドクサイ。

そして何かアイツの顔が歪んだ笑みを浮かべた、どうせ論破するつもりなんだろう。

「ならなんでお前は本局で保護されないんだ!」

「メンドクサイし管理局嫌いだし調べるとか言ってデータ取られるし管理局嫌いだし管理局に入られるし管理局が大嫌いだし、うん。管理局が嫌いだから信用できるフェイトに頼んだ、分かった?」

はつきりと管理局が嫌い、だけどフェイトは信用できる。
単純な理由を言ったけど笑うむしろあざ笑う。

「そんな理由でごまかしてるけどよ、てめえはフェイトが好きなのかなんだろ？」

「そうだよ」

僕が言った言葉に時間が止まる。

「まあ僕が好意的に思う人は全員好きになるのかな？ 嫌いは悪寒がするし」

僕の中では好きは吐き気がしないし少し明るくなる、嫌いは悪寒がするで判断している。それ以外は普通になるのか？

「う、うん。そうだよね……」

フェイトは何がっかりしてんだか、無自覚好意って言うの？

まあ個人的にはそれが勘違いでも本当でもどっちでも構わない、それに単純に好きって言うだけで顔を紅くして……。

そんなじゃあ愛してるとか言われたらとんでもない事になるぞ。

「な、こ……こいつ」

あ、どうやら驚いているらしい。まあ自分に素直に言ってみたらね、単純に単調に素直に言う。それが一番大事。
と、言うよりはメンドクサイだけなんだけど……。

「僕を論破したかったの？でも残念だね、僕はそういうのに興味が無いからさ」

ぶっちゃけ論破なんてどうでも良い、悪い行動でも自分に素直で行動する。後悔が無いわけじゃないけどね。

「それと一つ言わせて貰う、私はお前が嫌いだ。私の肩を殺傷設定で貰った時の事は忘れないぞ」

「な！嘘言ってるじゃねえ！！」

「嘘じゃない！私は知ってる！！」

フェイトが叫ぶ、その目はしっかりと大輝を見据えてる。

「え……フェイトちゃん……それどう言う」

「ウオオオオオオ！！！！」

高町なのはが言い終わる前に神崎大輝は白黒の双剣を投影し、僕に斬りかかって来た。

僕は刀を抜きそれを防ぐ。

「いい加減にしろ！！フェイトを操って……！！」

「てめえがいい加減にしろよ！！いい加減話を聞けこの馬鹿！！」

ギリギリ……と金属の音が響く。

「あーもう!! フェイト許可を!!」

「あ、うん!!」

「おし!!」

そのまま弾き飛ばす。

「フェイトちゃん!! どう言う事なの!!?」

「ごめんなのは……でも、話だけじゃあ……何も伝わらない!!」

フェイトもなのはに向かってそう言う。

何故か小さい高町なのはと小さいフェイトが脳裏をよぎる。

「おらあああああ!!」

「くそ!!」

また甲高い金属音が響く。

くそ、邪魔だ……。

「おら!!」

「うお!？」

左手の黒い双剣をかわす。

「……当たれよクズ」

「本当に転生者相手には容赦ないな」

「ハッ、たりめえだろ。悪いけどな、フェイトを元に戻しててめえは監獄にぶち込まなきゃいけないんでな」

「そりゃあ忙しい事で……っと!!」

「うお!？」

右手の白い剣をはじき一気に接近し切り裂く、無論非殺傷設定だから傷は付かない。

だけど痛みはある。

「がっ!!!? クソ……てめえ!!」

大輝は剣を振るう、けど戦ってよく分かった。

こいつに剣の才能が殆ど無い、だから剣道を習ってる初心者程度の腕前なんだ。

「なら……倒せる!!」

そう言って更に一閃、そのまま切り裂く。

「あぐあ!!!? クソ……ふざけんなああああ!!」

そう叫んで剣を破棄し、大輝は僕から離れた。

「てめえ……これは止められるか?」

そう言って黒い弓に黒い鏃を投影した。

フルンディング
「赤原獵犬!!」

そう言ってから放たれた鏃はそのまま僕に接近する。

「はっ!!」

そして僕はそれをはじく。

「今の矢に一体何が……」

「おい、そこに居ていいのか？」

「はっ? なに——ッ!!?」

って何時の間にか弾いた鏃がまた僕に接近していた。
それをまた弾き落す。

「これってまさか」

「その通りだ、そのままお前に当たるまでずっと狙い続ける。なあ
に安心しろ、非殺傷設定だ」

「ふざけんなああああああああ!!!!」

そんな矢使うな!!

……あ、でもあれなら防げるかも。

「フェイト!! あの中に入るぞ!!」

そう言ってフェイトの方を見る、そこには高町なのはと戦っているフェイトが居た。

「あ、う……分かった!」

そう言って戦いを止めてコッチに来るフェイト。

「待つてフェイトちゃん!!」

高町なのはがこっちに接近してくる、でもその前にあの矢を無効化しないと…………。

「無駄だぜ、フルンディングはお前を追い続ける」

そうかもしれないけど…………やってみなきゃ分からない!!

よし、遺跡の中に入った。やっぱり魔力がいきなり使えなくなる。そして矢も入る、赤い光が消失し矢だけになる。

「うおら!!」

そしてそれを地面に叩き落す。

矢は地面に当たりそのまま消え去る。

「マジかよ!! マグレじゃねえのかよ!!」

どうやら一回試したようだ…………。

でも今がチャンス。

「走って逃げるよ!!」

「貴様等はこの私の罠に嵌ったのだ!!」 (前書き)

早めに書き終わった…………。

前回の大輝の言動が悪かったなので今回は大輝の心情も加えました。

「貴様等はこの私の翼に嵌ったのだ!!」

——ボゴ!!

地面から手が一本だけ生えてきた。

その後刀が出てきてそのまま切り裂きオウカとフェイトが出てきた。

「…………ゲホっ!!」

「大丈夫、オウカ…………」

オウカは口から血を吐き出し、フェイトはそれを心配する。

「無理もねえよ…………炎じゃないやつ使ったんだから」

アギトがオウカに回復魔法を使う、ちなみに苦手だった回復魔法もオウカの負傷回数が多い為段々上達してきている。

「炎だけじゃないんだね、使えるの」

「…………他は物凄く力を…………ゴホッ!!…………使うし体の負担も大きい…………」

「見れば分かるよ」

オウカはダバダバと血を吐き出し続けている。
だがそれも十秒程度で治まる。

「ゲホッ……最近本当に血が足りない」

「そりゃあ最近ずっと血を吐きっ放しだからな」

「……………輸血でもしようかな？」

オウカは本当に真剣に考えていた。

「で、でも今は逃げられた事を考えようよ」

「そうだね、そーいやこーいいうのを漫画みたいに言う」と

オウカは一瞬溜めて

「貴様等はこの私の罠に嵌ったのだ！！だったっけ？」

「お願いだからそれは言わないでね、何かが起こりそうだから」

「……はあ」

ああ、さっきの俺は間違いなく最低系オリ主だったな……。それにフェイトに見られていたなんて……。そして明らかに挙動不審とか……。うん、これじゃあバレルよな。

「……大丈夫、大輝君……」

「……なのはか」

不安そうに話しかけてくる、でもその目には疑惑がある。そりゃそうだよな……。

「……なのは、俺って最低だな……」

「大輝君……」

ああ、俺は最低だ……。

フェイトに見られた事だって話す機会があったんだ、こうなれば……。フェイト達にもう一度会って本当のことを言わなくてはならない。

「アイツだって辛いのに……。本当に自分勝手だな……。俺って」

転生者の能力が分からないけどアンチ管理局と言うよりは純粹な被

害で嫌っているんだろう。

「……分かり合えるよ、話し合えば必ず」

「なのは……」

なのはがそう言ってくれたのが嬉しかった、そしてなのはの笑顔に惹かれた。

何故かハーレムと言う言葉に背徳感を感じる、どうしてだ？

でも本当に気になる、前回もそうだが……アイツのレアスキルって一体何なんだ？
そもそもアイツは本当に……

いや、ありえないだろう……。

「……なのは、ありがとな……」

そうだな……一人くらい……転生者が欲しかったんだ。
sts編はスカリエッティ側に転生者が居る筈だ……、それに対抗する為にも……。

「（そうだよね、大輝君は優しいから……何かが合ってもちゃんと教えてくれるよね）」

——こうして、一人の転生者は自分の間違いを認め反省した。彼は正しくなった。

「へえ、中々良い素材が居るネ♪」

——そう呟かれた声の主は誰にも聞かれることなく、消えた。

「うじうじ悩んでたって仕方が無い！！フェイトたちを探すぞ！！」

「うん！！」

——だが彼は近い将来、自分の身に危険が及ぶ事に気付いていなかった。

——カポーン

「はふう……………良い湯だな」

僕達は必死に隣町に逃げて今は旅館に泊まっている、温泉付きの結構金がかかる旅館だ。

本当に残金に気を使わないとな、まだまだ沢山あるけど……………お金は沢山あって困る物じゃあないからね。

「いや、温泉はリリンが生み出した最高の文化だね」

本当に体が芯から温まる、今の言葉は確かエヴァンゲリオンの台詞だったね。

人気作品だったから覚えている、前世の自分もよく……見てたっけ？

まあいいか……今は温泉を楽しもう。

「それにしても」

僕は自分の長すぎる髪を見る。

「本当に髪が長いな……」

髪長って不便だね、洗うのに時間がかかるし……。

そうだ、明日切ろう。

——その頃女湯では

「はふう………良い湯だな」

「確かに良い湯だね」

「むう………羨ましいぞ！フェイトの胸……！」

「そ、そうかな？アギトも可愛いから」

「私の胸は成長しねーよ……！少し寄越せ……！」

「え、ちよつとああ……！」

——そして男湯に戻る。

あゝ、今の男湯の状況は……………

「ウォオオオオオ！！！！何でこの壁を乗り越えられないんだ！！この壁の向こうに理想郷《アガルタ、もしくはアヴァロン》があるのに！！！」

「そうだ！何でこの壁があるんだ！！この向こうには嫁《幻想》が居るのに！！！」

「僕達はなんで海鳴に住めなかったんだ！！！」

明らかに馬鹿が居る、つかやっぱ海鳴に転生できた転生者って少ないんだね。

でもはつきり言っちゃあ迷惑、数が多いし……………吐血覚悟でやるか。

「はあ……………」

——またまた女湯

「さて、そろそろ上が」

『』『ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！！』『』『』

『いてええええええええええ！！！！』

『ち、縮む！あそこが縮む！！』

「……一体何が」

「……間違いなくオウカだな……」

「何か言った？」

「いや、別に」

「じゃあ上がろうよ」

「ああ」

——またまた男湯。

「ギヤアアアアアアア、つめてええええええ！」

「風呂で溶かしたいけど行けねえ!! 足が動かせない!!」

「縮む！ myステイックがお釈迦になる！！」

……あそこで風呂の水が凍り付いて移動が出来ない馬鹿達……、風呂に入っていない奴は大丈夫だったようだけど……。

だから氷で出来た禪を作った、まああくまで覗こうとした馬鹿だけ、純粹にお風呂に入ってる人は例外。

「ゲホ……本当に輸血も考えないと」

お風呂に直接血を吐いた僕はそのままお風呂からあがりかけ湯を体にかける。

「…………まあ凍傷にはならないだろうね、お風呂のお湯が流れてるわけだし…………熱いし」

そう言って僕は体をバスタオルで拭く。

『』『』頼む！俺達にお湯をかけてくれええええええええええ！！
『』『』

「……で、これからを如何するかだね」

フェイトは地図を開き僕達と一緒にこれから如何するかを考える事にした。

まあ当然だよ、ここから北海道までは本当に遠い。自転車だけの逃走なら一ヶ月近くかかるだろう。

「……ならさこうしてさこうして……さこうすれば」

「……それだと結構時間がかかるよね」

「まあそれは割り切るよ、それよりも」

僕はテレビにリモコンを向けてスイッチを押す。

《ででで〜ん、ででででででん》

「今は劇場版迷探偵ボナンでも見ようよ」

迷探偵ボナンとは名探偵ならぬ迷探偵の珍解答をするお話である。

《俺は》

——カチッ

「あああああああああああ！……！何でさ！……？なんで消したし！……」

「そんなのは後にして。今は行き方についてだよ、でも本当に良いの？ジグザグに進んでいく事にするって」

ああ、成る程……………。

「ああ、それね。大した意味は無いよ、まあたまにジグザグ、普通に真直ぐという感じ」

「…………まあそれで良いなら良いんだけど…………」

「じゃあ早くリモコン返して、ボナン見たいから」

「いや、私ベントタミン見たいから」

ベントタミンとは推理物の作品、女性に大人気。

「……………じゃんけん……………」

「はい、ベントタミン」

「何で!!!?!」

結局ベントタミンを見る羽目になったよチクショー!!!

とある世界にて

「ただいまデス♪頭領♪」

「……………」

「ああ、丁度良い駒を見つけたネ♪」

「……………分かった、そいつのデバイスにこれを入れろ」

「おお!!これが頭領がある人間から奪い取った獣のデータのタカネ!」
♪

「……………」

「了解だネ♪」

「貴様等はこの私の罠に嵌ったのだ!!」 (後書き)

次回から暫く管理局サイドは書きません、と言うよりは事件を……
：

変死体ってどんな死体なんだろうね、まあ変死っていうから常識では考えられ

なんか今回のグロイのが入りました。

でも大丈夫だよね？主人公はほとんど吐血しているから……慣れるよね？

と言うより連続投稿です！！

できればもっと明るい話を書きたいです……………。

変死体ってどんな死体なんだろうね、まあ変死って言うから常識では考えられな

現在、僕達は長野県に居ます。そして今は名物巡りです。

「いやー、はちのこって以外に美味しかったな。あんな見た目だけ
ど」

「よくアレを食べたよな……あたし達は無理だったけど」

「うん、流石にあれはね」

フェイトとアギトが顔を引きつらせながら買った蜂蜜を舐めてる。
まあはちのこは見た目がアレだから女の子にはきついかな……。

「じゃあ次は蕎麦にしよう!!」

この近くに有名な蕎麦屋さんがあるからね、そこで山菜蕎麦と天ぷ
ら蕎麦を食べたい。

「流石に食べすぎじゃない?」

「平気平気!!」

「うう………体重が……」

あれ? フェイトもしかして体重増えたの? と言ったら殺されかねな

いので言わない。

まあ美味しいからじゃなくて他に理由があるからね、僕の場合。

「別にフェイトは食わなくて良いんだぞ、オウカは単純に血が足りないから食ってるだけなんだし」

「え、そうなの？」

流石は僕の長年の相棒、^{パートナー}そう言うところよく分かってるねえ。

「あ、分かった？」

「そりゃああれから一週間経つてるとは言えよお、あのレアスキルの連発は体に堪えるだろ。しかも何回か火以外も使ってるんだからさ」

「まあそうなんだよね、ぶっちゃけ血も足りないしカロリーも足りない」

そう、僕の体は生まれる前から改造されてるからね。分かるのだけど筋肉繊維の数だってメツチャ多いし生産される血の量も多い、まあそれが追いつかないほど血を消費してるけど……………。

まあ僕は普通の人間の1.5倍の栄養とカロリーが必要だからね、それに最近m y自転車、プロミネンス号をメツチャこいでるからかなり体力使う。

本当にカロリー＋鉄分が欲しい、何故か最近鉄を見ると何故か涎が出るからね……………。

「まあだからさ……………って……………」

いきなり鼻に来る嫌な臭い。

「どうしたんだよオウカ？」

「血の臭いがする……結構濃い」

「お前の嗅覚って一体どうなってんだよ」

『うわあああああああ！！！！！！！？』

あ、今叫び声が聞こえた。

「……………行ってくるね」

フェイトは管理局員だからね、やっぱりこういうのは見逃せないんだろう。

僕個人としてはあまり関わりたくない、なんて言うんだろう。関わったら間違いなく厄介事だと頭の中に浮かぶ。

でも僕も気になる、家の中の臭いは流石に分らないけど近くで濃い血の臭いがしたんだ。血の量で例えるなら四肢と首を切り取られた時に出る血の量、もしくは体を縦から真っ二つにされ出てくる血の量と同じくらい出ている。

こんな真昼間でだ。

「あ、僕も行くよ！ちょっと不可解だし」

そう言って僕もフェイトの後を追う、もちろんアギトの手を掴み一緒にだ。

「ちよっ！速過ぎだっ！！」

いや、フェイトもかなり早い。

って人が集まっている場所があった、そこにフェイトが入ってくる。

「待ってって!! フェイト!!」

人ごみを掻き分けフェイトを探す、やっぱりテンプレ的に見える位置に居た。

「ようやく追い……………ついた」

フェイトは口を押さえて青い顔をしていた。

……………そりゃあするだろうね……………こんな変に体が振れている死体を見たら……………。

「フェイト……………」

これ以上見せたら吐きかねない為フェイトを無理やり自分の胸に押し付ける。

他人が見れば抱きしめている行為かもしれないけど……………今この場では仕方が無い。

『またかよ、今月で何人目だ?』

『十三人目だぜ、それに狙われてるのはあの不良グループだし』

『ああ、こいつ等には色々とかつい目に合わされて来たけどよ。まさか殺しちまう奴が居るなんてな』

周りの人の話し声がよく聞こえる、これまた殺されているのは不良グループらしい。

恨みを買うのは当たり前かもしれないけど殺す奴が居るとはね。

「……フェイト、行くよ」

フェイトを連れて行く、今はここに留まらせたくない。

それにお腹も減ってるし蕎麦屋に行かないと。

「……よく食べれるね」

フェイトは今も顔が青い、と言うよりさっきトイレでゲーゲー吐いてたからね。

「……被害者には悪いかもしれないけど……これは罰じゃないのかなって思った、殺された人たち全員どうしようもないほどのクズだったらしいし」

「……」

「この事件は殺された方が悪い、と言う言葉しか思い浮かばない」

いくらなんでも同情なんかする気分じゃない、むしろ死んで当たり前……というわけじゃあ無いけど…。

「……それにこの事件、100%警察じゃあ犯人を捕まえられない」

「どうしてだ？」

アギトが尋ねてくる、まあ殆ど感と前世の知識頼りなんだけど。

「この事件は魔法、もしくはレアスキルが起こした物だよ。つか僕の予想じゃあレアスキルになるけど」

「……………それ如何言う事？」

「まあ詳しい事は分からないけど空間を捻じ曲げるレアスキルがあるんだよ」

「それって一体？」

「歪曲の魔眼と呼ばれるスキル、目に写した場所に回転軸を作り曲げる事が出来る能力」

「……………なに、そのふざけた能力は」

あ、フェイトが驚いている。

「まあ確かに恐ろしいけど対処が出来ないわけじゃない、それ以上に恐ろしいレアスキルだってあるから」

その後に「まあ透視能力まで付いたら最悪だけどね」と付け加えた。まあこの事件に関しては透視能力も持っている事になる、それに今回ののは転生者が起こした事件だろう。

でも分からない、この事件を何故起こしているのかが……………。

「な、なあ……………あんた等……………」

そう思っていたら知らないおじさんに話しかけられた。
おじさんと言っても体は健康そうだしちゃんと鍛えられている、髭が似合う顔をしている薄紫色の髪をしている。ぶっちゃけ白髪に近い。

「今、魔法って言わなかったか？」

「ええ、言いましたが？」

「オウカ!？」

フェイトは驚いているけど僕には分かる。

あの事件現場でかいだ匂いの一部がこのおじさんについてるからだ。

「うちに来てくれないか？この事件の事で話がしたい」

「暫く泊めてくれるのであれば」

これはまた……厄介事のようなだね、まあ違うと言う事は今回は僕も乗り気と言う事だ。

まあフェイトはすっかりやる気になったようだから僕が手伝うのも強制なんだけど……。

それでも管理局預かりだからね、時空管理局のフェイトの補佐としてがんばりますか。

路地裏で一人のフードを被った少女と学ランを着た男が居た。男の右腕は完全に、そして不自然に振れていた。

「あ、あがああああああ!!!」

「汚い悲鳴だな」

フードを被った人間の声は高く、まだ完全に成長していない少女の声だ。

振れた腕から血が地面に落ち、男はフードを被った少女から離れようとする。だが少女がそれを許さないと言わんばかりに一步足を踏み込む。

「ひい!!!だ、誰か助けてくれ!!!」

「無駄だよ、ここには防音の結界を張っている。貴方がいくら助けを呼んでも誰も来ません、もつとも」

少女はさらに足を一步踏み込む。

「助けを呼んでる相手が貴方だと知ったら誰も助けないと思うけどね」

その言葉を言った直後に男の左腕は捻じ曲がる。

「あ、あがあああああああああああああああああああああ
ああ！！！！！」

「……曲れ」

次に左の太ももが振れる、血が大量に流れ出す。

「ヒギイイイイイイ！？」

男はのた打ち回る、だがそれすらも少女は許してはくれない。

「動くな」

少女は男の腹部を蹴る、それで男は使えない腕で腹を押さえようとする。

「……苦しいだろう、でもな……お兄ちゃんはもっと苦しかったんだ！！」

――ゴキン

男は首をねじ切られ、そのまま命を落した。

「……はあ……はあ……お兄ちゃん……やったよ、残りは後……六人だよ」

空を見上げた少女の顔は寂しそうな笑顔だった。

その日の夜のニュースに被害者が14人目になったと報じられた。

フロン少女にはご注意を！(前書き)

はいにからてらしらなもちのちにつらなとにんらなのちもちんらかいすなる

上の暗号を暇があれば解いて下さい。

ヒントはパソコンです。

……やる人いるかな？

ブラコン少女にはご注意を！

「ではそのソファ―に腰をかけて下さい」

目の前の男性に勧められるまま私とオウカとアギトはソファ―に腰掛ける。

この家、と言うよりは洋館に招待されてから既に十分。

目の前の男性が使用人らしき女性に茶を持って来る様に伝えるとコツチを見た。

「…………今起きてる事件は…………私の娘が起こしている事です」

男性の口から出た言葉に驚いていた、オウカは何となく予想はしていたらしいけど。

「…………どうしてその娘さんがそんな行動を？」

私が男性に聞く、でも男性は顔を下げ黙り込んだ。

「…………それは…………」

「ああ、言いたくないなら言わなくても良いです。取り合えずその子の名前を教えてください」

こうなると話が続かない、今は大雑把でもいいから情報が欲しい。

それにそういう情報は後になって明らかになると思う、推理小説のお約束だ。でも本当に推理になるのかな？ 私には何故かその犯人とオウカが戦う姿しか思い浮かばないんだけど。

「……名前は木蓮センナと言います」

「木蓮……センナですか……」

男性の言った名前を呟く。

「あー、すみません。トイレって何処にあるんですか？」

そしてオウカはいきなりそんなことを言った、空気を讀んでないよ……。

「ああ、トイレはこの部屋を出て真直ぐ行き左に曲があればありますよ」

「教えていただきありがとうございます、フェイト！ 後よろしくね」

オウカは私にに後を任せてそのままトイレに向かう。

「……そのセンナさんの写真がありますか？」

オウカがトイレに行ってる間に話を進めないと、そもそも私は管理局員だ。

オウカを一応保護しているといってもそんなに時間はかけられない、本当ならすぐに本局に連れて行かないと駄目なんだけど……本局で何かあったのか暫くは自由行動が取れるのが救いだ。

それにこの事件を解決して犯人を本局に送ればオウカの立場も良くなる筈……………」

「ええ、ありますよ。と言っても幼い頃の写真しかありませんが」
そう言って男性は写真を取り出して私とアギトに見せてくれた。

その写真には目の前の男性と綺麗な女性、一人の男の子にまだ幼い少女が居た。

「……この小さい子が…センナさん」

その少女の顔は優しそうな雰囲気でも人を殺すような子ではなさそうだった。

「ええ、その子です。母親に似て優しい子なんです」

「……でも何で……」

「……白夜が……」

「え、今なんて？」

「いいえ……なんでもありません」

この男性は何かを隠している、でも無理に聞き出そうとはしない……
…。何でか知らないけど……悲しそうに見えた。

「ただいま」

あ、ようやくオウカが戻ってきた。
少し遅かったけど如何したんだろう。

「ねえフェイト、犯人……木蓮センナの事分かった？」

「うん、幼い頃のだけど写真があったから」

私はその写真をオウカに見せるとオウカは顔を顰める。

「……この娘ならさつき外で見たよ」

オウカの口から放たれた言葉に私は度肝を抜かれた、それ以上に抜かれてる人も居るけど……。

「オウカってそういうのに関わりやすいよな、確かこう言うのてんぷらだったっけ？」

アギトごめん、今は構ってられない。今はオウカの放った言葉を処理しないと……。

「そ、それは本当ですか!!?」

って私より早く復活した男性がオウカの肩を掴んでいた。

「うお!! 揺れる揺れる!!」

「本当に居たんですか!!?」

「う、うん確かに居たよ……」

「そ、そうか………良かった」

男性は目に涙を溜めて床に伏せた。

「ねえオウカ、会ったってどういう事？」

「うん、実はさっきね」

オウカが口を開き話し出す。

——時はオウカが事を終え部屋に戻ろうとした時

「ふう………」

いやあここのトイレって多かったね、うん。旅館よりもあったと思う。

だからなのかな？妙に不安であまり集中できなかったのは………。

「まあいいか、それよりも早く戻らないとね」

フェイトとアギトが待っているかもしれないし、情報が欲しいからね。

「それに結構ラッキーだったね、お金も使わずにこんな良い所に泊まれたんだから」

まあ厄介な事件に関わるから一なんだけど………。

「にしても夜景も見れるなんて……って」

外で女の子がお腹を押さえて蹲っている、それに後ろから明らかに変な人が女の子に向かってジリジリと近づく。

流石に目の前でそんな犯罪行為をさせる訳にはいかないので助けに行くか。それだと断定するには早いかもしれないけど変な人の方は不良だろう。

そう思い窓を開けてそのまま飛び出し、女の子の近くによる。

「大丈夫？」

取り合えず、そう言う。

外傷は無い、多分腹痛か病気とかだと思う。

「……だれ？」

「通りすがりの」

後ろからバットが振り下ろされる。

その振り下ろされたバットの最も細い部分に足を振り下ろす。無論魔力による強化は施した。

その結果バットは根元から折れた。

「なっ!!?」

「正義の味方だね」

そして驚いている不良の顔に直接拳を決める、歯が折れ鼻血も出ていた。

「ぐうお、いてえ」

そう言うとは不良は走って逃げた、何かやられ役の匂いがぷんぷんしたな。

「あ、あの助けてくれてありがとうございます……」

「ん？別に良いよ」

そう言って少女の顔を見た、薄紫色の髪でピンクの綺麗な目に可愛らしい顔立ち。

顔はまさしく東方の古明地さとりだ。

「それより大丈夫？お腹押さえていたようだけど……」

「もう大丈夫です、それでは私はこれで……」

そう言ってさとり（仮）は去って行く。

「本当に大丈夫だったのかな？まあいいか」

それよりも戻らないと、フェイトに怒られるかもしれないからね。

「と言う訳、まさかあの子がその木蓮センナだったなんて」

折角会ったのに素顔が分からなかったから見逃してしまう事になるなんて……。

……でも焦っちゃ駄目、時間はある。でも何で木蓮センナは不良を

殺してるんだろう。

「……ごめん、フェイト……」

オウカが申し訳なさそうに言う。

「今日はもう遅いから……明日探そう」

「それならお部屋をご用意してます」

って何時の間に私の後ろに……。

「オウカ様は私に付いて来て下さい、フェイト様とアギト様はルチアに付いて行って下さい」

私はアギトと一緒にルチアと呼ばれたメイドに付いて行く。

行動は明日からだ。

「ヒギヤアアアアアアアアアア！！！！！」

男の右腕が振れていく、振れた場所は間接だ。そこから地が噴出し……捻じ曲がった手の色が青くなっていく。

「お、俺のうでえええええ!!!!」

「うるさい、黙れ」

「ひぎやあああああああ」

男の左足が振れ悲鳴を上げる、だが誰も助けに来ない。

「まさか私を襲おうとするなんて、あの時は動けなかったから危なかった。助けて貰った事に感謝しなくちゃね」

「な、
なんで……」

「だからしつこいよ、お前」

そのまま男は胴体が振れてその生命活動を停止する。

「ツ！コホコホ！」

少女は手で口を押さえ咳き込む、そしてその手を見る。その手には赤い液体が付着していた。

「……もう私は長くない……その前に……殺さないで……」

「あれ？ここ何処？」

フェイト・T・ハラOWNは白色の床しか無い空間に居た、空も白、床も白と床と空の境界線すら無いほど白だった。

「……私は確か……じゃあこれは……夢？」

フェイトは少しづつ思い出しながらあたりを見回す。

だがあるのは白い床と白い空、自分を鏡で写したかのようにそっくりで青色の髪をした少女だけ。

「ッ！！？貴女は！！？」

フェイトがその少女を見て驚愕する、成長してこそいるが……あれは間違いなく。

「ひっさしぶりー！！フェイト！」

少女はフェイトのバルディッシュに似たデバイスをくると回し上に放り投げる。

「僕は雷刃の襲撃者!! またの名を……レヴィ」

——ゴンッ!!

雷刃の襲撃者の頭に上に放り投げたバルディッシュに似たデバイスが頭に直撃して倒れる。

「ぎ……すら……しゃー」

——ドサ

雷刃の襲撃者、彼女は外見こそフェイトに似ているが中身は僕っ子のお馬鹿である。

フラコン少女にはご注意を！（後書き）

僕っ子は正義！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0299ba/>

テンプレチート？夢のまた夢だよ

2012年1月12日21時00分発行